君と私の恋愛模様

依槻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と私の恋愛模様

【Nコード】

N1656W

【作者名】

依槻

【あらすじ】

家庭教師ヒットマンリボンの二次創作作品です。

平凡な女の子が沢田綱吉くんに恋をしていく過程を書いたお話です。

プロローグ

好きになど、なりたくなかった。だって、私の恋は叶わないとわかっていてのだから。なのにどうして、想いは溢れるのだろう。

「ツナ君、おはよう。」

「おはよう、京子ちゃん！」

私の隣で明るい声で挨拶を交わす2人。笹川京子と沢田綱吉。私は沢田くんとは数えるほどしか話したことがない。2人が私の隣で会話を楽しんでいるのは私と京子が友達で、京子が私の席に話に来ているからだ。

「えっと、西崎さんもおはよう。」

「おはよう。」

私はちらり、と沢田くんの顔を見てすぐに視線を戻して挨拶を返した。素っ気ない私の態度に沢田くんが苦笑いしているのが声でわかった。

「おい、西崎！10代目に対してなんだその態度は！」

出たな、忠犬。大声で現れたのは沢田くんの忠犬、獄寺隼人。何だか知らないけど、誰にも媚びたりへつらったりしない彼が沢田くんには従っている。私としては鬱陶しいだけなんだけど。

「あんたにとっては大事な10代目なんだろうけど、私にとって沢

田くんはただのクラスメート！どんな態度とつたって問題ないと思うんですけど？」

立っている獄寺くんを睨みつけながら言えば、彼はわなわなと震えていた。

「相変わらず千景は厳しいな。」

ピリピリした空気を破ったのは幼なじみの山本武だった。いつも通りニコニコと笑いながら沢田くんの隣に立っていた。

武が沢田くんたちとつるむようになったのは中学の時から。沢田くんと関わってから武はちよつと変わった。何がって言われると言えないけど、1つ上げるとしたら、友達を何よりも大切に思うようになったと思う。

「山本、おはよう。」

「はよつ、ツナ。」

獄寺くん程ではないが武も沢田くん至上主義っぽいところがある。以前一度だけ聞いた時、彼は沢田くんに多くの事を教わったのだと言っていた。

沢田綱吉。

みんなが彼に魅せられる。それは勉強が出来るからとか、運動神経がいいからとかではない。というかそもそも沢田くんは勉強できないし、運動神経はよくない。でも、みんなにはそんなこと関係ないのだ。沢田綱吉には人を惹きつける力がある。

1 - 1 笑顔

私が笑ったら、君はとても嬉しそうに笑った。・・・変な人、そう思うのに私から零れたのはやっぱり笑顔だった。

「山本くんかっこいいな。」

広い方のグラウンドで野球をする男子を眺めながら友人の伊藤美砂緒は惚れ惚れと呟いた。美砂緒お目当ての武の方をじっと見るが別段格好よく見えるわけじゃない。たぶん武は格好いい部類に入るのだろうけれど私には野球が大好きなただの男の子にしか見えない。

「ばかね、美砂緒。あんなのただの野球バカじゃない。」

野球の見学をしていた私たちの元にやってきたのは黒川花。同い年とは思えないほど大人びていてお姉さんみたいな人だ。

「何よ、花。山本くんは十分かっこいいよ。」

むっとした様子の美砂緒に花はやれやれ、と言った感じでため息をついた。

「男はやっぱり年上よ。牛柄のお兄さんのような。」

「花、それも違うと思う。」

京子の友人であるだけに花もなかなか突っ込みどころのある友人であると思う。ちなみに花の言う牛柄の人はたぶん黙っていれば格好いいのだと思う。私も中学のときに何度か遭遇した。でも、格好い

いというかへタレっぽい感じだった。

「何よ、千景。じゃああんたはどんな人がいいのよ。」

どんな、と言われ私は返答に困る。別に格好いい人を好きになるわけではないし、何で相手を好きになったのかなんてはつきり言っていない。

「私は強い人がいいな。」

柔らかい声色に振り返れば笑顔で佇む京子がいた。

「強い人？何、空手のチャンピオンみたいな人がいいの？」

「力じゃなくて心がだよ。」

そう言っただ京子が微笑み見つめる先にいたのは沢田くんだった。ああ、京子も沢田綱吉という人に惹かれた1人だったんだ。沢田くんを見つめる京子の表情は柔らかくて、すごく綺麗だった。そんな彼女をボーっと見つめていたら視界の端に白い物を見た。

「京子っ！」

咄嗟に体が動き、私は自分より背の低い京子を覆うように抱きしめた。肩に鈍い痛みが響く。

「っ！」

「ちかちゃん！」

飛んできたのは野球のボールだったらしい。目の前で泣きそうな顔をする京子に苦笑する。

「そんな顔しなくても大丈夫だよ。」

ぼんぼん、と京子の頭を撫でているとこちらに駆けてくる足音が聞こえた。

「悪い、大丈夫か？・・・って当たったの西崎？」

「そうですね？」

駆け寄ってきた男子生徒は申し訳なさそうな顔から一転笑顔になった。

「なら大丈夫だな。笹川さんに当たったと思ったから超焦った。」

「顔面か？顔面に一発入れて欲しいのか？」

男子生徒の肩を掴み、殴る準備をする。

「殴れ、千景！女に当てるなんて最低！」

「ちか、本当に大丈夫？」

「ちかちゃんにちゃんと謝って！」

3人の女子、しかもアイドルの京子にまで非難され、男子生徒もたじたじだ。

「ごめん、西崎さん。俺がボール取り損ねたんだ。」

謝罪の言葉を口にしたのは目の前で肩を掴んでいる男子生徒ではなく、その後ろから現れた沢田くんだった。

「そ、そうだ！全部沢田が悪い。」

「そんなわけあるか。」

私は宣言通り、男子生徒の顔面をグーで殴った。

「いってー！お前なー！」

「今のはおめえが悪いな。」

「謝ることも肝心だぞ、田中。」

あ、田中って言うんだこの人。武と獄寺くんに挟まれてしまった男子生徒、田中くんを見て、私は場違いなことを考える。

「それよりちかちゃん、肩大丈夫？」

京子がそつと触れた肩に強い痛みが走る。だが痛がるそぶりなど見せない。京子たちに心配かけたくないのだ。

「大丈夫。そろそろ授業終わるし戻ろう？」

そう言ってその場を去ろうとしたが痛みのある肩とは逆側の腕を掴まれ、私は動けなかった。驚いて振り返ると私の腕を掴んでいるのは沢田くんだった。

「ダメだよ。ちゃんと見てもらおう。俺が付き添うからみんなは戻つてて。」

「ちよっ！沢田くん!？」

強い力ではないけど有無を言わせぬ雰囲気だ。沢田くんは私の腕を引いて保健室に連れていく。戸惑いつつも私は沢田くんに従った。

「失礼します。」

「なんだボンゴレじゃねーか。俺は男はみねーぞ。」

「その台詞は医者としてどうなんだ!？・・・っーか、怪我したのは俺じゃなくて西崎さん。」

保健医のシャマル先生は男を見ないことで有名。女好きの変態なのだが何故か女子生徒からの人気は高かったりする。それよりもシャマル先生と沢田くんが親しげなことに驚く。

「西崎く?・・・うおお！千景ちゃ〜ん!」

突然こちらに突進してきたシャマル先生。私は反射的に保健室の扉を思いっきり閉めた。バンっ!というものすごい音が聞こえた。

「容赦ねー!」

「お、思わず・・・。」

恐る恐る扉を開けるとシャマル先生が完全に伸びて倒れていた。

「「……………」」

「えっと、中に入るうか。」

「うん。」

沢田くんに促され、私たちはシャマル先生の体を踏みつけて……
じゃなかった、乗り越えて保健室の中に入った。

「じゃあ肩見せてくれる？」

「……沢田くん、大胆だね。」

「え？」

私の言った意味が分かっていない沢田くんに悪戯心を刺激されながら私は負傷している右肩の体操着を少しずらした。

「!?!」

みるみる沢田くんの顔が赤くなっていく。まあ当たり前なんだけど、肩に湿布貼るにはブラの肩紐が見えちゃうんだよね。武とかだったら平然としてそうだけど沢田くんは見るからに純情そうだし。

「沢田くん恥ずかしいよ。」

恥じるように少し俯きぎみになってみた。

「お、お、俺、そんなつもりじゃ!」

かなり動揺している沢田くん。面白すぎて笑いを堪えるのがつらい。

「・・・西崎さん、笑ってない?笑ってるよね?」

「わ、笑ってないよ。」

「いや、声笑ってるし、肩震えてるから!」

どうやら誤魔化せていなかったらしい。そうとわかったらもう隠す必要はないので私は声を挙げて笑った。だって高校生にしてこの純情さは貴重だと思うよ。

「笑いすぎ!」

「ご、ごめん。でも、可愛くって。」

「それ褒め言葉じゃないからね!?」

「え、褒めてるのに。」

「俺男だからね!?」

突っ込み続ける沢田くんには私は珍しいくらいケラケラ笑った。そんな私の様子を見て、彼の表情が少し変わった。

「どうしたの?」

「いや、よかった、と思って。」

「？」

意味がわからなくて、私は首を傾げた。

「西崎さん俺と話すときは笑ってくれないから嫌われてるのかと思つてた。」

そんなつもりはなかったのだが元々そんなに笑わない私は自然と無表情で接していたのだらう。言葉もきついつてよく言われるし。

「だからよかつた、と思つて。」

そう言つて沢田くんはすごく嬉しそうに笑つた。変な人。私はただ面白かつたから笑つただけなのに。変な人。そう思うけど、沢田くんの笑顔を見えていたら私まで自然に笑顔になっていた。

1 - 2 放課後

学校帰り、私は真っ直ぐバイト先である叔母の家に向かう。

「ただいま、穂月さん。」

「おかえり、千景。」

につこり微笑む楠木穂月さんは私の自慢の叔母さんである。穂月さんはレトロな雰囲気のカフェを経営している。私はこの空気と穂月さんの淹れてくれるコーヒーが大好きだ。物心ついた時にはここにおいて、高校生になってからはバイトとして働いていて、最近では時々コーヒーを淹れさせてもらえるようになった。

「あんた毎日毎日ここにいるけど、他に行く場所ないの？」

寂しい子だね、穂月さんはそう言ってため息をつくけど、武が野球に夢中になって他のことが疎かなのと同じで私はコーヒーに夢中なのだ。全然寂しくなんてない。

「そう言えば、今日も来てるよ、あの坊や。」

そう言って穂月さんが指差した先にいたのは赤ちゃんなのに黒いスーツが妙に似合ってる最近の常連さん、リボン。くん付けしたら呼捨てでいいと言われた。やっぱりちよつと不思議な赤ちゃん。

「こんにちは、リボン。」

私は挨拶と共に私の淹れたエスプレッソを出す。リボンはここに

来ると必ずエスプレッソを頼むのだ。最初は穂月さんの淹れるものしか飲んでくれなかったのだが最近では私の実力を認めてくれたのか飲んでくれて、しかもアドバイスまでしてくれる。

「千景か。・・・また上達したな。」

エスプレッソを一口すすり、リボーンはニヒルな笑みを浮かべて言った。リボーンがお世辞を言わないと知っている私はお褒めの言葉を素直に受け取り、嬉しさに頬を緩める。

「西崎さん!？」

びつくりして背筋を伸ばし、お店の入り口を見やればこちらもびつくりしている沢田くんがお店に片足を踏み入れた状態のなんと微妙な格好で立っていた。

「何してんだ、ダメツナ。さっさと入れ。」

「ダメツナ言うな!」

「沢田くん、リボーンと知り合い?」

「俺はツナの家教師なんだぞ。」

リボーン、赤ちゃんじゃないの?ますます不思議な赤ん坊だ、と心で呟きながらこちらに歩いてきた沢田くんを見やれば、彼は何故かスーツを着ていた。

「沢田くん、その格好・・・。」

「こ、これは……。」

「就活？」

「俺らまだ高2だよな!？」

沢田くんの見事な突っ込みに私は確かに、と納得する。でも、だつたらどうしてスーツ?しかも結構高そう。

「ツナは仕事の手伝いに来たんだぞ。まあ、バイトみたいなもんだ。」

スーツ着てバイト?しかもここで?色んな疑問は浮かんだがそこまですで私が関わるべきではないと思い、そ

うなんだ、と返すだけに留める。冷静なりボンの隣で沢田くんが安堵の息をついている辺り何かあるのだろうが、沢田くんがほっとしているなら、聞かなくてよかった、と思った。

その後、お店にやってきたのはやつぱり黒いスーツに身を包んだ人たち。沢田くんとりボンは彼らと向かい合い、何かを真剣に話し合っていた。真剣な顔をした沢田くんの横顔は私の知る幼さのある彼ではなく、男の人だった。ドキリ、としたのが三分の一。寂しいと感じたのが三分の二。まるで知らない人のようで、遠い人のよう。昔の古傷が疼いた気がした。

1 - 3 秘め事

君の笑った顔を見ると、何故か私は切なくなるの。ついこの間まで近く感じていた君を今はとても遠い人のように感じる。あの人のように……。

喫茶店で沢田くんと遭遇した翌日、彼は私を避けるように目も合わそうとはしてくれなかった。たぶん、仕事中の自分を見られたのが嫌だったんだろう。だからって避けなくてもいいと思うのだが……。

「ちか、もう進路調査だした？」

「ぼーっと沢田くんの後姿を追いかけていたら、美砂緒が声をかけてきた。慌てて意識を戻し、質問を繰り返すよう目だけで訴えれば、美砂緒は読みとってくれたのかため息をつく。」

「だから、進路調査。」

「ああ。……まだ。美砂緒は？」

「まだ。まだ高2だよ？進路なんてわかんないよ。」

「逆。もう高2でしょ。来年は受験で卒業だよ。」

「先のこと言わないでよ。」

淡々と言えば、美砂緒はしゃがみ込んで机に突っ伏した。そんな彼女に聞こえないようにため息をつき、自分の将来を考える。みんな

口には出さないけど、色々考えているんだろう。・・・私は？私は何がしたいのだろう。コーヒ―を淹れるのは好きだ。でもだからといってそれでどうしようという気はない。

「どうした、千景。元気ねーじゃん。」

「・・・武か。」

ちら、と声の主である武を見上げ、それがわかると興味が失せて、私は視線を再び遠くに飛ばす。別の人にこれをやるとものすごい怒られるけど、武はこれが私の考え込んでいる時の癖だと知っているので文句は言っていない。

「山本くんは進路決まってる？やっぱりプロ目指すの？」

「ん〜。どうだろうな。」

美砂緒の質問に武ははつきりとは答えなかった。中学までなら確実に頷いていたであろう質問。私は不思議に思い、思考を中断して彼を見上げた。そこにいたのは曖昧な笑みを浮かべ、私の知らない顔をする武。17年間ずっと一緒にいたけど、こんな彼の顔は見たことがない。いや、ずっと一緒にいたというのは語弊がある。たぶん、私が知らない武は一杯いる。武の知らない私がいるように。

「伊藤は？」

「私はまだなの。」

頬を染めて話す美砂緒。そう言えば、この子は武が好きなんだったっけ。ということは私は邪魔者かな。そう思い、私は席を立って廊

下に出る。昼休みはまだあるし、自販機で飲み物でも買おうかと1階の購買に向かえば、自販機の前には沢田くんがいた。珍しく獄寺くんはおらず、彼は一人だった。

「お金ないの？」

ぼーっと立っている沢田くんに見れば彼はびくり、と肩を揺らし、困った顔で私を振り返った。そんな顔をされては悪いことをしている気持ちになる。

「沢田くん、今日ずっと私のこと避けてない？」

「そ、そんなつもりじゃ……。」

「昨日のこと、私は別に問い詰めたりしないよ。」

「え？」

ポカン、とした沢田くんを一瞥し、自販機から一歩退いた沢田くんに一言言っただけは私がお金を投入する。なんとなくいちごミルクな気分だったのでそれにする。買い終わってもう一度沢田くんを見れば、彼は相変わらずポカン、としていて、その表情が愛らしくて、思わず笑ってしまった。

「な、何で笑うの!？」

「ごめん、なんか反応可愛くて。」

「前も言っただけでそれ嬉しくないからね!？」

突っ込みを入れる沢田くんはいつもの沢田くんで私は笑いを止められない。ひとしきり笑い終わった頃には沢田くんは少々不貞腐れた様子で立っていた。

「いいんだよ、沢田くん。」

「え？」

「話したくないことを無理に説明する必要なんてないから。人間には黙秘権があるしね。」

「・・・壮大な話になったね。」

冷ややかに突っ込みを入れる沢田くんに苦笑し、しかしその笑みはすぐに解かれる。

「人にはさ、誰にだって話したくないことはあるよ。だからさ、無理に話さなくていいと思う。私も無理に聞いたりしない。」

「うん。ありがとう。」

ほっとしたように笑う沢田くんはやっぱり、遠くに感じた。

「でもさ、沢田くんには武や獄寺くんがいるんだから抱えきれなくなったら頼っていいと思うよ。2人ともきつと喜んで協力してくれるから。」

「うん。」

何故だろう。ついこの間まで近くに感じていたのに。笑った顔のみ

るとつられて笑顔になってしまったのに。今は何故か・・・切なくなる。遠くに感じるの。どうして？どうして私は、それを寂しく感じるの？

「戻ろうか。」

「西崎さん。」

「ん？」

振り返ると沢田くんは心配そうな真剣な表情で私に尋ねた。

「西崎さんには話せる人がいる？」

「・・・。いいの。私は、誰にも話したくないから。」

それはいないって言ってるようなものなんだけど、でも私はそれでいいから。だって、誰にも話したくないの。

誰にも知られたくないの。……………3年前の恋のこと。

1 - 4 悩み

私は彼に出会ったことを後悔しているのだろうか。彼からの連絡が途絶えてもう2年。私は、まだ待ち続けるのだろうか。まだ、彼の事を想っているのだろうか。

沢田くんに投げやりの言葉を言ってしまったからというものの、彼は時折心配そうに私を見る。人の良さそうな沢田くんのことだ。あの言葉を聞いて私が何か抱えているのではないかと心配してくれているんだろう。あの日言ったことは私の本心だし、撤回するつもりはない。誰かに話して困る話でもないのだけれど、誰にも何も言うて欲しくないから。だから言わないだけ。だから沢田くんが気にする必要なんてこれっぽっちもないのに。

「だから、ここに来てまでそんな顔しないでくれる？」
私は苦笑しながらカウンター席に座る沢田くん言う。そんな私に沢田くんは困ったような笑顔を返す。本当に、莫迦な人だと思う。友人に対してならまだしもただのクラスメイトの私をそんなに心配しなくてもいいのに。

沢田くんは最近よく、私のバイト先、つまりは叔母の穂月さんの喫茶店に顔をだすようになった。大抵はリポーンの仕事のお手伝いで、後は息抜きだ、と言って。よくわからないけど、このお店を気に入ってくれたのなら嬉しい。

「そんなに顔に出た？」

「うん。」

真顔で頷けば、沢田くんは苦笑いを浮かべる。彼らしくない、綺麗な笑い方。何て言うか、作り物みたいな。沢田くんは隠し事ができないタイプだと思ってた。慌てるときも嬉しい時も隠せずすぐに顔に出てたから。傍から見てる私でもわかるくらい。でも、最近の彼はよくこっぴどって誤魔化すような綺麗な笑いを浮かべる。まるで、感情を表に出さないようにしているみたいだ。

深くなっというこうとする思考に蓋をして、私は沢田くんにかプチーノを出す。リポーンのお仕事を手伝っている時は他の人と合わせてコーヒーを飲んでいるけど、沢田くんはコーヒーが苦手らしい。だから彼の好みに合わせた少し甘めのカプチーノを私は沢田くんが来ると必ず出す。沢田くんもそれ以外注文してこない。苦くてダメだという彼は同じ年の沢田綱吉くんらしくて少し安心する。・・・何で安心するんだろう？

「誰にも話さなくてつらくならないの？」

「へ？」

間抜けな声を上げてしまった。じっと見つめてくる沢田くんに少したじろぎながら彼の質問をもう一度頭の中で考える。えっと、たぶんこの間の誰にも話したくないという発言からの質問だね。やっぱり心配してくれていたのか、と思うと何故か少し泣きたくなった。

「・・・だって誰かに話したら褪せてしまいそうだから。」

きつとみんな口を揃えて言う。2年も連絡をよこさないような奴、待つだけ無駄だと。自分でその言葉を言うのはいい。でも、人に言われたら、ずっと大切にしてきたあの日々が、全部嘘に思えてしまいそうで、私の大切にしてきたもの全て偽りに変わってしまいそう

で。だったら話したくない。話さなくていいと思った。

「朝、目が覚めてわずかな希望を抱いて、一日の終わりに喪失感に襲われて。毎日がその繰り返し。」

期待しては裏切られ。でも希望は捨てられなくて。そんなことをもう3年も続けている。なんて、愚かしいのだろう。

「西崎さん？」

名前を呼ばれてはつとする。私は何を悠々と語っていたんだろう。唐突に話しただけに、沢田くんはきよとん、としている。ちょっと可愛いと思った。じゃなくて……！

「ごめん、変な話をして。忘れ……。」

「そう思う頃より前に戻りたいと思う？」

私の言葉を遮り、沢田くんが問いかける。どこか焦りを含んだ声と瞳に私は言葉に詰まる。

「……沢田くんは、戻りたいと思うの？なかったことにしたいと思うの？」

たぶん、今の質問は自分自身に問いかけたものなのだろう。問い返された沢田くんはとても罰が悪そうに私から目を反らした。まるで悪戯がみつかった子どものように。

「時々、思うんだ。リポーンに会わなければ、俺はずっとダメツナのままだったかもしれないけど、それなりに平穏な毎日を送れてい

たんじやないかって。誰かを巻き込むことも傷つけることもなく、ただ平穩に。」

「……。」

遠い過去を懐かしむように沢田くんは呟くように話す。その瞳は何処か別の場所に向けられていた。もうその頃には戻れない。そう分かっているから、沢田くんはこんなにも悲しそうな顔をしているのだろう。

「例えば……。」

沈黙を破った私の声に沢田くんは肩をビクツと跳ねさせ、緩々と顔を上げた。とても不安そうな顔。思わず、大丈夫だよ、と抱きしめてやりたくなる。

「例えば、私の幼なじみの野球バカ。」

「それ、山本だよね……。」

いつもの突っ込みに苦笑いを浮かべる沢田くん。ちよっといつもの彼らしさを覗かせた沢田くんに私の頬が自然と緩む。

「うん、武。武は野球が大好きでしょ？夢はでっかくプロ野球選手。毎日毎日、それこそ耳にタコが出来るくらい言ってた。……でも、最近はやわない。」

思い当たることがあるのか、沢田くんは気まずそうに目を反らした。

「どうしてなのかは知らないよ。でも、武はプロ野球選手の道を諦

めるくらい大事なものが出来たんだよ。」

「大事な物？」

「人はね、何かを得るためにはそれ相応の代価を支払うの。武は夢を捨ててでもそれを手に入れることを望んだんだよ。」

そう断言できる。武は昔から人気者だった。でも、彼の中で野球が一番で友達は二番だった。それでも彼は人気者だったし、別に薄情なわけでもなかった。でも、沢田さんと仲良くなつてからは変わったの。前よりもずっと強くなった。何がって聞かれると困るけど、強くなつたって思う。武は選んだ。野球でなく、沢田さんという友達を。

「武は何度やり直しても同じ道を選ぶよ。沢田くんだって、リボンと出逢つてたくさんのお物を得たでしょ？そして同時に捨てたの。」

そう、私も彼を待ち続けるために時間を捨てた。得る者があると信じて。

「うん。そうだね。」

ほんの少しだけ、彼の表情が和らいだように見えた。

「例えば、私の淹れたカプチーノが飲める、とかね。」

冗談めかしてそう言えば、沢田くんはいつもの笑顔で笑ってくれた。それが嬉しくて私もつられて笑みを浮かべる。

私は私が彼と出逢つて何を得たのかまだわからない。待ち続ける

ことで何かを得られるのかもわからない。だけど……。こうして笑ってくれる沢田くんと出逢うことが出来たのは彼のおかげの気がするから。どんなに苦しくても悲しくても、出会わなければよかったとは思いたくない。

1 - 5 再会

再会というのは突然なもので予想外の出来事まで連れてくる。

「千景！外に超イケメンのお兄さんがいるよ！」

「は？」

珍しく興奮している花には悪いがイケメンお兄さんとやらの興味の
ない私は冷めた反応をとってしまった。

「さつきちよつとだけ見えただけだけど、金髪のイケメンだったよ。」

「ふん。花。」

「何？」

「帰っていい？」

帰り支度をしつかり終えている私は未だ有頂天な花に笑顔で言う。
イケメンがどうのこうのという話よりも早く帰ってコーヒーの練習
をした方が有意義に決まっている。

私は花に早々に別れを告げ、学校を出た。校門の前にはそのイケ
メンを見に来たらしい女子で溢れかえっていた。その中に、見覚え
のあるススキ色の髪が見えた気がしたのは気のせいだろうか。

バイトを始めてしばらくすると最近ではもう馴染みの顔となった
人が現れた。

「いらつしゃいませ、沢田くん。暇なの？」

「笑顔で毒吐かないで!？」

来店早々華麗な突っ込みを入れる沢田くん。リボンが彼をいじつて楽しむ理由がわかる気がする。

「だってスーツじゃないし、仕事じゃないんでしょ？」

「半々かな？ただ、今日はそんな堅苦しいものじゃないからさ。」

そう言つて入ってきた沢田くんの後ろからぞろぞろと見覚えのある顔とない顔とが入ってきた。

「って武!？」

「おう!そう言えばここ、お前の叔母さんの店だったな。」

にかつと笑う武に、かくん、と肩が下がる。あたしの驚きを返せつて言いたくなるくらい普通の反応。

「獄寺くんに了平さんに雲雀さんに知らない女の子・・・沢田くんどっかの不良のボスみたいだね。」

「うえ!？」

笑つてそう言えば、沢田くんは変な声を上げ、慌てふためく・・・私、何か悪いこと言っちゃったのかな。

「君、おもしろいこと言うね。」

「?・・・えっと、ありがとうございます?」

雲雀さんに褒められ、わけのわからないままお礼を言う。

「10代目を困らせるんじゃないか!」

「ちょっと、うるさい!お店の中で叫ばないで!」

煩い獄寺くんと私が睨みあっていると沢田くんは慌ててみんなに座るように指示をした。沢田くんに声をかけられたことで獄寺くんは一気に表情を明るくさせ、席についた。この沢田くん至上主義め。殴ってやりたい衝動にかられたがなんとか落ち着きを取り戻し、オーダーに向かう。

「可愛いお嬢さんは何にします?」

「え?」

私はまずメンバー唯一の女の子に声をかけた。

「お前はホストか!」

獄寺くんが突っ込みを入れてきたけど、そこは華麗に無視。私と彼はまさに水と油。合わないんだよね。

「お勧めはエスプレッソですけど、沢田くんのように苦い物が苦手でしたら甘めのカプチーノもお作りしますよ。」

「お子様ですみませんね！」

「そんなこと言ってないのに。」

「じゃあ甘めのカプチーノで。」

「はい、かしこまりました。」

沢田くんはいつものカプチーノ。獄寺くんと良平さんはエスプレッソ、雲雀さんは紅茶で武は特別オーダーの緑茶。

沢田くんと不思議メンバーは雲雀さんとクロームちゃんという女の子意外楽しそうに話している。私は全員分の飲み物を穂月さんと共に淹れ、彼等の元に運んで行く。近づいていくと金髪の髪が見えた。その後姿に私の思考は停止する。

そんなはずない……。

「ディーノさんもうとうとう結婚か。」

ディーノ。その名前に私の心臓が大きく跳ねる。

「羨ましいか、ツナ。」

結婚……？

食器が床に落ち、割れる音が店内に響き渡る。その音に全員の視線が私に集まる。彼も私を見る。

「千景……！」

「・・・。」

2年前、連絡の途切れた彼が、デイリーノがそこにいた。・・・女の
人を連れて。

1 - 6 過去？

彼と私が出会ったのは私がまだ中学1年生の時だった。

もうだいぶ学校生活にも慣れ、通学路をいつものように歩いて帰っているとき目の前で躓いて転んだ人がいた。それは見事な転び方だった。

「・・・大丈夫ですか？」

声をかけるか一瞬悩んだが目の目でこう派手に転ばれては見て見ぬふりは出来ず、私は彼に近づいた。

「ああ、大丈夫だ。」

そうやって顔を上げた彼は凄く整った顔をした所謂美青年だった。日本人にはない雰囲気、金髪。どうみても彼は外国人。しかし彼の紡ぐ日本語は癖もなくとても綺麗だった。

「ちょっと聞きたいんだが、並中ってどこにあるんだ？なかなか辿り着かなくてよ。」

「並中はすぐそこですけど。」

私の言葉に彼は目を瞬かせる。その顔は少し幼くて、可愛いと思った。私は彼にわかるように道を説明した。彼は日本語が堪能だったので日本語の説明だけで十分に理解してくれたので助かった。

「いや、助かった。ありがとな。」

にっこり笑い、彼は歩き出した。と、同時に転んだ。

「あの、本当に大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だ。」

たぶん顔面を強打したのだろう。彼は顔を抑えて答えた。そして立ち上がり、何故かまたすぐにこけた。

全く進まない。ある意味天才的なドジさ。私はため息をつき、彼に手を差し出した。

「並中まで送ります。」

「いや、大丈夫だって！」

「目の前で3回も頃ばれたら説得力がありません。」

もう一度ため息をつき、彼の腕を掴んで引っ張った。

「腕を掴んでください。」

「なんか、お前の方が年上みたいだな。」

「あなたが頼りなさすぎるんです。」

「言ってくれるな。」

そう言って彼は笑った。いや、そこは怒るところだから。なんとも

独特な世界を持った人だ。呆れながら見上げると彼のおでこからは血が出ていた。

「血が出てる。」

私は背伸びをしてハンカチで血を拭う。

「あ、おい！汚れちまうぞ！」

「そもそもハンカチは汚れを取るものなんです。問題ありません。」
すり傷程度の怪我だったので血もすぐに止まりそうだった。そのことに安堵しつつ、私は鞆から絆創膏を取り出し、彼のおでこに張ってやった。

「これでよし。・・・！」

張り終わってから彼との距離があまりにも近いことに気がついた。男子とあまり接点のない私はこんなに男の人に近づいたことがない。頬に熱が集まるのを感じる。

「どうした？」

「な、何でもありません！」

慌てて彼から放れようとする腕を掴み逆に引き寄せられてしまった。

「！...！」

「照れてんだろ。可愛いな。」

彼は優しく笑い、私の頭をぽんぽん、と撫でた。

どこか冷めた所があり、しっかり者と思われている私は可愛いと言われたこともこんな風に頭を撫でられたこともなかった。余計に恥ずかしくなってさっきより頬が熱くなった。

「男をそんな顔で見るもんじゃねえぞ。」

「え？」

自分がどんな顔をしているのかなんてわからなくて、私は戸惑いの声を上げる。するとしばらくして彼の手が私の頭から放れた。それを少し寂しく思う。

「俺はディーノだ。お前の名前は？」

「……西崎千景。」

それが私とディーノの出逢いだった。そして、私が生まれて初めての恋をした日。

1 - 7 過去？

「よっ！千景。」

学校を出るとほぼ同時に声をかけられた。金髪の美青年。

「ディーノ。・・・暇なの？」

「一言目がそれか！？」

ディーノと出逢った中1の春から約2年。私は中3になっていた。

ディーノはあの出会いからというもののほぼ毎日のように並中に来て待ち伏せている。

口では辛辣のことを言うが私自身毎日のようにディーノに会えるのは正直嬉しい。

初めて出会ったあの日から私は彼に恋をしている。

初めて会ったあの日から、私は日ごとに彼を好きになる。まるで強力な磁石で吸い寄せられるかの如く彼に惹かれている。

「おっと、電話だ。」

「早く出なよ。」

「悪いな。」

一言私に詫びを入れ、彼は携帯を開いた。瞬間、いつも明るいい笑顔を浮かべている彼の表情が曇る。

「・・・はい。・・・その話は既にお断りしているはずですが。」
デイーノは時折、こうして私にはわからないような難しい話をする。そんな彼を見ると自分がとてつもなく子どもに見える。置いてけぼりをくらったような気持ちになる。

どんなに背伸びをしたってわたしはまだ14歳の女の子。デイーノからすれば私は子どもでしかないだろう。それがとても寂しい。

お願い。置いて行かないで。

「千景？」

「え？」

いつの間に電話を終えたのか、デイーノは不思議そうな顔で私を見つめ、指さした。彼が指差したのはデイーノの腕を掴んでいる私の手。

「!?!」

私は慌てて手を放す。無意識の行動とはいえ恥ずかしすぎる。頬に熱が集まるのを感じる。絶対に今、私の顔は真っ赤だ。そんな顔をデイーノに見せるのは憚られて、私は彼よりも一歩前を歩きだした。

「千景、俺、イタリアに帰るよ。」

「・・・え？」

私は足を止め、彼を振り返った。彼の言葉を何度も、何度も頭の中で反芻する。

今、彼は帰ると言ったのだろうか。イタリアに、彼の故郷に帰ると言った？

「何、で？」

絞り出した声は微かに震えていた。一時帰国であればこの1年にだって何度もあった。でも、そうならそうとディーノは律儀に私に帰る日取りまで教えてくれる。

でも今回は違う。

こんなに真剣な表情をしたディーノを私は知らない。彼はきつと、もう日本には戻ってこない。出来ることなら冗談だと言って欲しい。

「元々、俺はイタリアの人間だし、そろそろ仕事をしないと。」

苦笑を浮かべ、ディーノは私に歩み寄り、大粒の雨を降らす私の瞳から涙を掬った。

「聡いな、千景。お前の想像通り、俺はきっと今までのように日本に来ることはないと思う。」

そんな風に笑って言わないでよ。涙で歪む視界だったがディーノが笑っているのは何となくわかった。何かを耐えた笑みだということも。

「好き。」

私の発した言葉に私の頬に触れていたディーノの手が震えたのを感じた。

「好き。」

あなたの事を何にも知らない私だけど、大人なあなたには不釣り合いなほど幼い私だけど、それでも好き。

放れたくないと、会えなくなるのは嫌だと、心が訴えてる。

それぐらいあなたが好き。

私を真っ直ぐに見つめてくれるあなたの瞳が、優しく包み込むように笑うあなたの笑顔が、時折意地悪なあなたが、大好きなの。

頬に触れているディーノの手に自分の手を重ねる。

「さよならなんて、嫌だよ・・・、ディーノ。」

重ねた手を握られ、私は彼に引き寄せられた。そして力強い腕に包まれた。愛しい人の腕の中。驚きで、涙が止まった。

「俺だって、お前が好きだ。」

耳元で囁かれた声は震えていた。しかしそれは何よりも甘い言葉だった。

「放れたくないし、放したくない。お前とずっと一緒にいたい。」
満たされて、幸せなはずなのに、私の瞳からは涙がまた溢れだして
きた。でもさっきの涙とは違う。悲しいんじゃない、これは嬉し涙。
私の想いにあなたが答えてくれた。

「千景、いつになるかわからないけど、お前を迎えに来る。だから、
それまで待っていてくれるか？」

私が泣き止み、落ち着いた頃、ディーノはそう言った。いつもは輝
かしい笑顔を浮かべている顔が今は何処か不安げでそれさえも愛お
しい。

彼がいつになるかわからないと言うのだ、本当にいつ迎えに来れる
かわからないんだろう。

それでもいいと思った。彼を待っていていようと思った。

「待ってる。私はここで、自分の夢を目指しながらディーノが迎え
に来るのを待ってるよ。」

そう言って微笑めば、ディーノは一瞬泣きそうな顔をしてそして私
に触れるだけのキスをくれた。

「出発までまだ少し時間がある。だから、別れがくるその日まで一
杯一緒にいよう。」

その言葉通り、私たちは出来る限りの時間を一緒に過ごした。

今まで通り放課後は夜まで一緒に過ごしたし、休みの日は少し遠出

もした。遊園地も行ったし、水族館にも行った。私がお弁当を作ってピクニックにも行った。

離れている間も思い出が2人を支えてくれるようにと、互いを忘れないようにと。

そして、春から夏へと季節が変わろうとした頃、ディーノは日本を旅立った。

中学3年生の私は実った初恋に夢中だった。夢中で、そして信じて疑わなかった。

彼はきつと迎えに来てくれる。いつも自分達の心は繋がっている。

そう、勘違いしていた。

裏切られる日はすぐそこに迫っていたというのに。

ディーノが旅立ってしばらくはこまめに彼から連絡が来ていた。しかし、それも時が経つごとに減っていき、そして、季節が夏から秋に変わった頃、彼からの連絡は完全に途切れた。

1 - 8 決別

会いたかった人との再会は、私の予想を上回る最悪なものとなった。

ディーノと再会したからって私の日常が何か変わるのかと言ったら特に何も変わらない。いつもと同じ学校に行って、授業を受けて、友達と話して、帰って、寝て。今までと何も変わらない。日常というサイクルにたいして大きな変化は起きない。

いや、起きているか。

手に持った空のマグカップを見て、私は苦笑する。あの日から、私は穂月さんのお店に顔を出していない。ディーノと再会したあの店に行くことができなかった。穂月さんは私の気持ちを汲んで、長いお休みをくれた。

「莫迦みたい。」

今まで何してたの？

あの人誰？

結婚って何？

・・・どうして、突然現れて私をかき乱すの！？

頭を廻る同じ言葉に苛立ち、私は持っていたマグカップを床に叩きつけた。床に落とされたマグカップは音を立てて割れ、破片が床に

散らばった。

悲しいのか、憎いのか、悔しいのか、わからない。全部かもしれない。頭がぐちゃぐちゃで、心もぐちゃぐちゃで、ただ、苦しい。でも涙は出ない。出るのは自嘲的な笑い。

「莫迦みたい。」

何度も同じ言葉を繰り返す。そうだ。私が莫迦だった。2年も彼を待っていた私が莫迦だったんだ。本当だったら連絡が来ない時点で忘れるべきだったのだから。なんて滑稽なんだろう。なんて、愚かなのだろう。

「西崎さん！」

学校の帰り道、聞き覚えのある声に振り返る。そこにいたのはディノと再会して以来言葉を交わしていなかった沢田くんだった。正確には私が避けていたから話してなかったのだけど。左右には獄寺くんと武もいた。

「何？」

正直、彼らとは話したくなかった。だって、話題はディノのことに決まってる。彼の話なんて聞きたくない。

「わかってんだろ。跳ね馬のことだ。」

「跳ね馬？」

「あ、デイーノさんのことな。」

聞き覚えのない呼び名に首をひねれば武が補足してくれた。ああ、でも結局デイーノのことか。私は彼等から視線を外し、小さなため息をつく。

「デイーノとは別に何でもないよ。ただ昔ちょっと話したことがあるだけ。」

「そんな相手に、お前はあんなに動揺すんのかよ。」

かわそうとする私の言葉を許さないというように獄寺くんは厳しい口調で言った。確かにそんなことで動揺するわけがないと自分でも分かっているので彼を睨むことしか反撃が出来ない。

「西崎さんの誰にも話せない秘密ってデイーノさんのこと？」

ああ、彼にはそんな話をしたんだっけ。

「そっだよ。毎日、毎日、彼からの連絡を待って、今日は連絡が来るんじゃないか、今日こそは校門の前から顔を表すんじゃないか、明日は、明後日は……。そうやって、ずっと待ってた。ずっとデイーノを待ってた。」

でも、もう待ったって意味がない。彼にはもう別の人がいる。私はただ気まぐれで構われてただけ。それを本気と勝手に思っただけで待ち続けて傷ついてるだけ。ああ、ばかばかしい。

「西崎さ……。」

「何かを失って何かを得るって言ったけど、あれ嘘かもね。私は何も得なかった。」

出会わなければよかったと、思うことだけはしなくなかった。でも・・・。

「こんなことなら、ディーノに出会わなければよかった。」

「それは違うよ!」

強い言葉に否定され、私は目を見開き、沢田くんを見た。

どうして、そんな顔するの？

今にも泣き出しそうな、悲しそうな顔。どうして君がそんな顔をするの？

「ディーノさんと出逢って嬉しかったことだっけってきつとたくさんあっただろ?」

「・・・うん。」

そうだ。全部が全部悲しい思い出なんかじゃない。ディーノと過ごした日々には私は確かに幸せを感じていた。ディーノにとって遊びでも、それでも私は確かに彼からたくさん幸せな気持ちもらった。

「そんでな、千景。俺たちからひとつ提案があるんだ。」

「ん?・・・ていうか、武のその類はどうしたの?」

最近顔を合わせていないから今気がついたけど、武の頬には湿布がしてあった。野球の練習で怪我でもしたのだろうか。

「これか？気にすんな。」

にっこり笑って言う武に私はそれ以上の追及を諦めた。笑って気にするな、と言うときは絶対にその理由を教えてくれないから。私はため息をつき、頷いた。了承の意を示した私に武の表情は少し和らぐ。

「それで、提案って？」

「デイーノさんともう一度話をしてみない？」

「デイーノと？」

「跳ね馬はもうすぐ婚約パーティーをするんだ。その席には俺達も呼ばれてる。一般人のお前は本当だったら入れねえんだが、俺たちが機会を作ってやる。」

獄寺くんの説明は分かりやすかったがわからないこともたくさんあった。まずパーティーが開かれるということは2人がそれだけ上流階級の人ってことだ。そしてそれに沢田くんたちも呼ばれている。

君は、君たちはいったい何者なの？

「詳しいことは話せないんだけど、やっぱり、ちゃんと決着をつけた方がすっきりするんじゃないかと思って。」

私の心中を読みとったように沢田くんが補足をいれる。たぶん、何者なのかっていうのが、沢田くんが私や他の人に聞かれたくない事柄なんだろう。

「10代目からの提案だからな。俺達も出来る限りのことはする。」

「うん、ありがとう。・・・よろしくお願いします。」

私は彼等に頭を下げる。ディーノと会って何を話したらいいのかわからないけど、でも、終わりにしなくちゃいけないから。

空が夕暮れから星空へと変わる頃、キャッパローネの屋敷では賑やかなパーティーが行われていた。

今晚は、ディーノと同盟ファミリーであるレイデローネファミリーのご令嬢との婚約パーティーが開催されているのだ。

ひたすら各ファミリーのボスに挨拶をして回っていたディーノは気付かれぬように小さくため息をつく。

「ため息つくと、幸せが逃げますよ。」

そう言って差し出されたグラスに驚いて顔を上げれば目の前にいたのはボンゴレ10代目候補の沢田綱吉だった。

ほんの数年前までマフィアは嫌だ、痛いのは嫌だと言っていたディーノの弟分はあつという間に成長を遂げ、今では彼をボンゴレ10代目とすることに異論を唱える者がいなくなってしまうくらい、綱吉はマフィア界で認められる人物へと成長していた。

「ツナ。・・・ありがとな。」

引きつった笑みを浮かべ、綱吉からのグラスを受け取る。現ボンゴレトップの9代目に代わり、今回のパーティーに出席している綱吉とその守護者たちとは先日いざこざを起こしてしまったのだ。それだけに顔を合わせづらかった。

「山本に殴られた傷、平気ですか？」

「痛みはあるがメイクでカモフラージュしてる。問題ないさ。」

先日のいざござの際、デイーノは綱吉の雨の守護者山本武に思い切り殴られたのだ。普段は温厚な山本らしからぬ行動ではあったが大切な幼なじみを傷つけたのだ。手が出て当然とも思える。大人げなく殴り返してしまったし。

「デイーノさん。少し、お時間頂けますか？」

綱吉の言葉に首を傾げつつ、デイーノは頷いた。そして彼に連れられて言ったのはバルコニーへと続く窓の前だった。赤いカーテンが風に揺られている。その向こうで誰かの気配を感じた。

「ボンゴレ10代目の俺がここで護衛するわけにはいかないんで、うちの守護者を2人、護衛につけておきますね。」

晴れの守護者笹川了平。

雲の守護者雲雀恭弥。

了平はまだしも孤高の浮き雲と謳われる恭弥が護衛なるものを引きつけたことに家庭教師として彼の事を知っているデイーノとしては驚きのあまり言葉が出ない。

「骸とクロームには幻覚でデイーノさんがいるように仕立て上げるし、獄寺くんと山本がフォローに回ってくれてるんで何も心配ありません。」

「いや、意味わかんねえんだが。随分な手の込みようだが、なんだ

「ってんだ？」

「俺たちのお姫様がお待ちですよってことです。」

それだけ言っつて、綱吉は人ごみの中へと消えて行った。

お姫様。

綱吉の言っつた言葉で思い当たる人物はただ一人。そんなはずはないと思いつつ、ごくり、と喉がなる。

「早く行きなよ。彼女、ずっと待ってたんだからさ。」

「事情は沢田たちから聞いた。殴つてやりたいが山本がもう殴つたらしいからな。諦めてやる。」

「じゃあ、やっぱり……。」

「だから早く行きなつてば。いくら沢田綱吉や僕らでもそんなに時間をやれないんだから。」

恭弥に一睨みされ、デイーノは苦笑を浮かべつつ、緊張した足取りでカーテンをめくる。彼女に、この世で愛したたった一人の人になんと言っつていいのかわからない。誤魔化すべきなのか、正直な気持ちを話すべきなのか、デイーノは心を決めかけていた。

「……デイーノ？」

懐かしい声に名前を呼ばれ、顔を上げ、デイーノは息を飲んだ。

「千景。」

大人しめな濃紺のドレスに最低限のアクセサリーをつけ、髪を結い上げた千景は先日見た彼女よりも数段に大人っぽく、月明かりが彼女の魅力を引きたてていた。

目の前に現れた彼に私の心臓は鼓動を早めた。沢田くんたちがここで待つてろって言うから待つてたけど、まさか本当にディーノが来るとは思っていなかったから。

「久しぶり。」

私は自分を落ち着かせ、なんとか笑みを浮かべながらそう言った。実際はうまく笑えていないかもしれないけど、でも決めたから。自分の精一杯でディーノの前に立とうって。

「どうして、ここに？」

「沢田くんたちが連れて来てくれたの。ディーノと話が出来るのは今日が最後だろうからって。」

「そうか。」

ああ、ディーノだ。私は唐突にそう思った。

月明かりで輝く綺麗な金髪。低めの優しい声。ディーノからの連絡が途絶えて時間が経てばたつほどに思った。

私は彼が好きなのだろうか、と。離れている時間が長ければ長いほど、私は自分の心がわからなくなった。

でも、今わかった。

私は今でも彼が好きだ。悔しいくらい、大好きだ。

「本当はね、恨み事一杯言ってると思ってきたの。だって、私の青春は全部ディーノに持っていかれちゃったんだもの。言いたくもなると思わない？」

「ああ、そうだな。」

「でもね、ディーノの顔見たらそんなのどうでもよくなっちゃった。」

だって、再び会ったあなたはこんなにも愛おしいから。会えて、こうして話せるだけで嬉しいから。

だからお願いよ。そんなに悲しそうな顔をしないで。

「何、言ってるんだ。責めるよ！お前に待ってるって言ったくせに、突然連絡を絶った俺を！結婚しようとしてる俺を！お前を縛り続けた俺を！」

「責めないよ。だってそれでも、私はディーノが好きだもの。昔よりずっと、好きだもの。」

呆気にとられたような顔をしたディーノは泣きそうに顔を歪めた。

抱きしめてあげたくなった。抱きしめて、もういいよって言ってあげたい。泣かないでって言ってあげたい。でも、それはやっちゃいけないから。

「本当は結婚おめでとぅって言ってあげたかったんだけど、言えないや。」

「え？」

「デイーノのことまだ好きだから、おめでとぅって言えない。．．．ごめんね。」

あなたはもう、私の恋人のデイーノじゃない。私が触れていい、デイーノじゃない。どんなにあなたが好きでもあなたはもう、他の女（ひと）のものだから。

「デイーノ。」

未だ窓のすぐ側にいる彼に歩み寄り、そつとその頬に手を伸ばす。触れるか触れないかのぎりぎりの所で私は手を止める。そんな私をデイーノは不思議そうに見た。何で、触れないのか、彼の瞳はそう問いかけていた。素直な彼に私は苦笑する。

「莫迦だな、デイーノ。あなたはもう、私の恋人じゃないんだよ。人の物に勝手に触れるわけにいかないでしょう？」

「そう、だな。」

デイーノの瞳が哀しげに揺れる。それでも笑ってくれる。優しい人。私のためにあなたは笑ってくれる。

「ねえ、ひとつだけ、聞いてもいい？」

「何だ？」

「私のこと、少しでも好きでいてくれた？私のこと……。」

「好きだった！」

私の言葉を遮る強い言葉と共に、私は彼の腕の中に閉じ込められていた。

「好きだった。自分でも驚くくらいお前が好きだった。本当はお前を迎えに行きたかった。自分だけのものにしたかった！」

私を抱きしめるディーノの腕の力が強くなる。

ああ、もう十分だ。もう、その言葉だけで十分だ。

そっと、ディーノの胸を押し返す。私の拒絶にディーノは緩々と拘束を解く。放れていく温もりがこんなにも切ないなんて、思いもしなかった。

目頭が熱い。泣いてしまいそう。

でも、笑わなくちゃ。こんな私を愛してくれた彼に出来るのはそれくらいだから。

「千景、俺は……!」

「ダメだよ、ディーノ。その先は言っちゃダメ。だって、言ったらきつとお互いに今以上に苦しくなるだけだから。」

拳を握りしめ、唇を噛みしめ、ディーノは紡ごうとした言葉を押し殺す。そして顔を上げ、微笑んでくれた。

「そうだな。」

私も彼に笑顔を返す。愛しい人、どうかずっと笑っていて。どうか、幸せになつて。

「もう、戻った方がいいよ。今日の主役でしょ?」

「ああ。」

「「おまじゆなら、ディーノノ千景。」」

1 - 10 進むために

さようなら、愛しい人。誰よりも愛しています。

去っていく愛しい人の後姿が見えなくなるまで見つめていた。これが最後だから。しっかりと目に焼きつけておきたかった。

バルコニーへと続く窓が閉じられた音を聞き、私はバルコニーの柵に手をのせ、空を見上げた。今日の月は特別綺麗に見えた。

「西崎さん。」

どれくらいそうしていたのだろうか。声をかけられ、私は我に返った。振り返れば沢田くんが立っていた。スーツを着た彼はやっぱり大人びていて、案外スーツが似合うのだと再認識する。

「沢田くん。」

私はちゃんと沢田くんに向き直り、深々と頭を下げた。

「デイーノと話をさせてくれてありがとう。すっきりした。」

「すっきりしたなら、顔上げてよ。真っ直ぐ俺を見てよ。」

「。。。。。」

何で、わかつちゃうのかな。

私が頭を下げた理由。顔を見られたくないからだって、何でわかつ

ちやうのかな。

頭の上から呆れたような小さなため息が聞こえた。そして腕を掴まれ、引つ張られたと思っただら目の前に真っ暗な壁が出現した。抱きしめられているのだと気付くのに数秒かった。

「これなら顔見えないから。」

「。。。。。」

「よく、頑張ったね。」

そう言って頭を撫でてくれた沢田くんの手がとても温かくて涙が溢れた。

本当は、ディーノを行かせたくなかった。

どうして、彼の隣に立つのが私じゃないんだろう。

どうして、私は彼の隣に立てないんだろう。

本当は抱きしめ続けて欲しかったのに。

その背に腕をまわして抱きしめたかったのに。

あの言葉の続きだっけと聞きたかったのに。

どうしてしちゃいけないことばかりなんだろう。

どうして私は、大好きな人を他の女の元へ送り出さなければいけな

いんだろう。

「頑張ったね。」

デイーノには言いたくても絶対に言えない奥底の本音を、口に出さなくても沢田くんは全部分かってくれてるみたいに、私を褒めてくれた。

まだ苦しいし、悲しいけど、でも、デイーノが私を好きだったと言ってくれたから、沢田くんが頑張ったねって褒めてくれたから、私はこの涙が乾く頃には笑えると思う。笑って前に進めると思うんだ。

だから、今はまだ、泣くことを許して欲しい。

1-11 新たな予感

「獄寺くん、ディーノのこと、もう少し詳しく教えて欲しいんだけど。」

「諦めたんじゃないかったのかよ。」

獄寺くんの前に手製のエスプレッソを置き、私は彼の真正面に腰を下ろす。

私たちは今、穂月さんの喫茶店にいる。しばらくサボっていたせいでコーヒーを淹れる腕が大分落ちた私はただ今リハビリ中。獄寺くんはその実験台だ。本人には言わないけど。

「諦めるって言い方むかつくけど、ディーノのことはまあ、完全にじゃないけどふっきたよ。でも、ち

ゃんと納得するために、知っておきたい。何で、ディーノの結婚が決まったのか。」

真っ直ぐ獄寺くん見て言えば、彼は少し困った顔をして、私から視線を反らした。

「っーか、何で俺に聞くんだよ。山本とかに聞きゃあいいだろうが。」

「だって武説明下手じゃん。」

はつきり言って武は説明に向かない。なんか効果音で説明しようとするから全然わかんない。ていうか、武に説明されて理解できたこ

とってあんましない。それに……。

「それにたぶん、武は私にこの件にはもう関わって欲しくないと思うから。」

「確かにな。」

「それで沢田くんはどうかと思ったけど、あの人嘘つけなさそうだし。これ以上、彼に負担をかけるのは申し訳ないから。」

武もだけど、沢田くんは私を彼等の世界には巻き込みたくないと思っていた。だけど、私がディーノを好きだったから、忘れられないから、彼は私のために策を練ってくれた。沢田くんが色々な気をまわしてくれたおかげで私は彼等の世界がどんなものか未だ知らずにいられる。これ以上、気苦労をかけるわけにはいかない。

「それで了平さんに聞こうかと思ったんだけど、あの人も説明できるんじゃないじゃん？で、雲雀さんはどうかと思ったんだけどあの人と仲良くないし、危険因子に自ら近づきたくないし、で、クロームちゃんはどうかと思ったんだけど巻き込むの可哀そうだし。それでしょうがなく獄寺くんに説明してもらおうと思って。」

「そんなに俺が嫌いか。」

「まあまあ。で、説明して欲しいんだけど。」

もう一度今度は笑顔で頼めば、彼は再び大きなため息をついた。そして何かを考えるように目を閉じた。そして目を開けると同時にディーノの周りで起こっていたことを話してくれた。

「はね馬は大企業の社長な。多くの企業を従えるでかい会社の社長だ。んで、その会社と競うようにB社という会社が勢いを伸ばし始めた。まあはね馬の会社には大した影響はないかもしれないがあんまし素行がいい会社じゃなくてな。そこでトップであるはね馬の会社が提携を組もうと提案した。するとB社は自分の娘を娶ってくれたら提携を組むと言ってきた。・・・何で、自分の娘を娶らせたいかわかるか？」

「えっと、自分の会社との繋がりをより強くするため？」

「そうだ。娘を娶らせることで他の会社以上に強固な関係が作れるからな。これからの企業の安定を考えるならB社を潰すわけにはいかない。そして自分の下に着く奴らを守るためにはね馬に残された道はそれしかなかった。一言で言うなら政略結婚だな。」

想像以上に、ディーノの周りでは大変なことが起きていたらしい。

「はね馬、最初は断っていたらしい。」

「え？」

「自分には決めた相手がいるから、他の条件にしてくれって。色々、他の方法も考えたらしい。だが・・・。」

「ありがとう。」

「は？」

突然お礼を言った私に訳がわからない、といった様子で獄寺くんが

瞬きしながらこちらを見ていた。呆けたその顔が珍しくて私は思わず笑ってしまった。

「ディーノが本当は迎えに行きたかったって言うてくれたんだ。それが嘘じゃないってわかって嬉しかった。だから、ありがとう。」

「それでも、あいつが選んだのは仲間だ。」

「うん、それでいい。ディーノがどれだけ部下の人を大切に思っていたのか私は知ってる。だから、部下を守るっていう決断はディーノらしくて、良いと思う。」

「ちっ。お人好しな女だな。」

「獄寺くんだって十分お人好しでしょ。私の我儘に付き合ってくれてありがとう。エスプレッソのお代りいかが？今度は穂月さんに淹れてもらうからおいしいよ。」

「・・・お前が淹れたのでいい。」

照れ臭いのか、獄寺くんは私の方を見ずに立ちあがっている私にカップを差し出してきた。ぶっちゃけ獄寺くんは沢田くん至上主義過ぎてたまにうざいけど、悪い人ではないのだと思う。さすが沢田くんの友達だけあってお人よしだ。

「んじゃ、また明日な、西崎。」

「うん。今日はありがとう。」

獄寺くんは私が淹れなおしたエスプレッソを飲み終わると帰って行

った。私は彼が出ていったのを見送ると新しいエスプレッソを淹れ、カウンターに座る一人のお客の元へと運んだ。

真つ黒なスーツに身を包んだ赤ん坊の元へ。

「私が無理矢理頼んだのだから獄寺君を責めないでよ。リボン。」

「何も言わねえぞ。お前、あの説明じゃ俺達の世界がどんなか全然わかんねえだろ。」

「わからん。それに、知らない方がいいんでしょう?」

「お前の為をいうならな。」

そう言つてカップに口をつける。文句を言つてこない辺り、味は悪くないようだ。それを確認してから私はリボンの隣に腰かけた。

「相変わらず客のいない店だな。人気ねえんだな。」

「その人気のない店を気に入ってるのは何処の誰だ、この野郎。」

「それはさておきだ。」

あ、無視しやがった。この赤ん坊、腹立つな。

「そう怒んな。コーヒーの味は気に入ってるぞ。」

「あれ?私口に出してた?」

「俺は読心術が使えるからな。」

プライベートの侵害だな。偉そうに言うリボンに私は心の中で突っ込む。私はため息をつき、リボンに視線を戻した。彼が何を言いに今日ここへ来たのかなんとなくわかっている。

「忠告に来たんでしょう？ 沢田くんたちに関する事で。」

「聡い奴は嫌いじゃねえぞ。」

「どーも。」

「関わるな、とは言わねえ。だがな、距離を間違えるな。間違っても、ツナを好きになるなよ。」

「何で私が沢田くんを好きになるのよ。」

「千景。」

静かな低い声で名前を呼ばれ、私はビクッと肩を竦める。名前を呼ばれただけなのに、身が強張るほどの威圧感を感じる。

「距離を間違えば、互いにつらくなるだけだ。ツナがお前を進んで巻き込もうとするとは思えねえが、まだ甘いからな。だからこそ、お前が距離を誤るな、千景。」

私が沢田くんを好きになるとか、そんなの想像も出来ないけど、リボンの言葉は重くて、私はごくり、と唾を飲む。

「……つまり、これ以上踏み込むってこと？」

「そういうことだ。一定の距離を保ち続ける。退くことがあっても踏み込むな。ツナを傷つけないならな。」

否定を許されない威圧感に私は頷くことしか出来なかった。距離の取り方をどうすればいいのか正直わからなかったけど、分かったことがひとつ。私が距離を誤れば傷つく人がいるのだということ。

「わかった。」

あの時、私はそう言ってリボーンの言葉を理解したつもりだったが、たぶん何も分かってなかったんだ。距離を取るということがどういうことなのか。自分がどれだけ危うい位置に立っていたのか。

何ひとつ、わかっていなかった……。

1 - 11 新たな予感（後書き）

一応ここまで第一部完結です。ここまで読んでくださりありがとうございます。
ございます。

次回から第二部が始まります。一部はヒロインの過去の恋の話だったんですが、二部からはこれからの恋の話です。よろしければ引き続き次回のお話もお楽しみください。

2 - 1 羨望（前書き）

第二部のスタートです。

2 - 1 羨望

距離の取り方を間違えるな。そう言われた時にはもう、間違えていたのかもしれない。

「おはよう、西崎さん。昨日の宿題やってきた？」

「おはよう、沢田くん。見せないよ。」

挨拶と共に冷ややかに断った私に沢田くんは苦笑する。

半年前まで挨拶もろくに交わさなかった私と沢田くんだが、今ではこうして会話らしい会話もするようになった。そして春。私たちは高校3年生になった。とは言っても、2年から3年はクラス替えをせずに持ちあがるため、代わりばえはしないのだが。

「別に出来ない訳じゃないんだから自分でやりなさい。」

「はい。」

渋々ノートを取り出し、数学の宿題を始める沢田くんは苦笑しながら様子を見守る。いや、見張るって言った方が正しいかな？ちなみにすぐに私に頼ろうとするのがもう1名いる。

「千景！宿題見せてくれ！」

「お前も自分でやれ！」

教室に入ってきて早々宿題を見せると言う武に厳しく言い放つ。す

ると彼も渋々、と言った様子で沢田くんの隣に座り2人で宿題を始める。3年になってからというもののこの光景が当たり前になってきてしまった。

「出来ました。」

「よろしい。」

終わらせた2人の宿題を確認し、間違いがないかをチェックする。どうやら2人とも馬鹿ではないらしく、全問正解とはいかないがなかなかの出来栄であった。最初っからやればいいのに。

「こことここが違うけど、まあこんだけ出来てれば大丈夫なんじゃない？」

「よかった。」

「な。千景は厳しいからな。」

「感謝しろ？宿題のチェックしてやってんだから感謝しろ？」

ノートで2人の頭を叩きながら言えば、何ともいえぬ苦笑いが返ってきた。

「ちかちゃん、お疲れ様。」

「ありがとう、京子。この2人には全く感謝の意志ってものがないんだよ。」

劣いの言葉をくれる京子の頭を撫でれば彼女はくすぐったそうに身

を振りながら愛らしい笑顔で笑った。本当に可愛いな、この子。・
・そういえば、京子は沢田くんが好きなんだっけ。ふと、そんなこ
とを思つて私は何やらノートと睨めっこを始めた沢田くんと京子を
見比べた。2人が並んだら、愛らしいカップルなんだろうな。

「西崎さん、こここうだった？」

「ん？ああ、そう。なんだ、やれば出来るじゃない。」

どうやら先ほど間違えた場所を解き直していたらしい。しかもちや
んと解けてるし。

「いつもこれなら成績も上がるだろうに。」

「それじゃあ俺がいつも怠けているみたいに聞こえるんだけど。」

「え、違うの？」

「本気で不思議そうに聞かないで!？」

「ツナ、いじられてんな。」

「山本、なんか楽しんでない？」

突っ込み連発の沢田くんを私と武は笑つて流す。若干不貞腐れ気味
の沢田くんだったけど最終的には笑っていた。

「ちかちゃん。」

「ん？」

「あの、今日の放課後空いてるかな？聞いて欲しいことがあるの。」
名前を呼ばれ振り返ればどこか不安げな様子で京子が私を見ていた。

「今日はバイトがあるんだ。」

「そっか。」

見るからにしょげる京子になんだかもものすごく申し訳なくなってきた、私は考えた末、口を開く。

「バイトまでの間でよければ空いてるけど。いい？」

「うん。」

花が咲いたように微笑む京子に短い時間でもあげられてよかった、
と思っほつと息をつく。

「それで話って？」

穂月さんのカフェまで京子を連れてきた私は彼女に紅茶を出し、彼女の向かい側に腰掛けた。そういえば、沢田くんの不思議さを知ったのも、ディーノに再会したのも、リポーンに忠告を受けたのもここだった。さて、今日は何があるのやら。話を聞く前の私は懐かしさに現を抜かしていたのだ。

「ツナくんのことなの。」

「沢田くん？」

「わ、私、ツナくんのことが好き。」

顔を真っ赤にして言う京子はとても愛らしくて、女の子だと思った。その表情を見ると、ディーノを好きだった自分を思い出す。恋に必死だった自分は今はもう、遠くに感じる。

「私が沢田くんと最近仲良くなりだしたのが気になる？」

「え、えつと……。うん。」

あまりにも素直で愛らしい彼女に私は思わず笑ってしまう。本当に沢田くんが好きなのだわかった。

「実はね、私の好きだった人沢田くんが知り合いで、その人との恋を終わらせるのに協力してもらったの。それで少し仲良くなっただけ。」

彼のおかげでディーノのことに関しては自分でもびっくりするくらいすつきりとしている。昔を思い出して心が温かくなることはあっても泣きそうになることはない。

「感謝はしてるけど、恋愛感情はないよ。だから頑張れ、京子。」

「ありがとう、ちかちゃん。」

ほっとしたように笑って京子は帰って行った。

「恋する乙女はかわいいねえ。」

「親父みたいだぞ、千景。」

「!?!」

びっくりして振り返るとリボーンがカウンター席でエスプレッソを飲んでいた。何でここにいるのかしら。

「暇なの？リボーン。」

「お前、そんな接客態度だから客が減るんだぞ。」

「あたしが客減らしてるみたいない言い方やめてくれる？」

リボーンという言葉にイラツとしながらもふと浮かんだ疑問をそのまま彼に尋ねてみる。

「京子が沢田くんを好きになるのはいいの？」

「ああ。京子は全部知ってるからな。」

「それって、沢田くんの秘密のこと？」

「そうだぞ。」

「そっか。」

つまり、京子は私の知らない沢田くんのことを知ってるんだ。その

うえでリボンからも関わることによしとされてるわけだ。

羨ましいな。

・・・羨ましい？何で？

「千景。」

自分の思考にフリーズしているとリボンに名前を呼ばれた。その表情は厳しい。でも、何故そんな顔をして名前を呼ばれたのかわからなくて、私は首を傾げる。

「お前……。」

「千景！もう仕事の時間だよ！」

「あ、ごめんなさい！ごめん、リボン。」

穂月さんの怒声に私は慌てて店の奥に入った。

今思えば、あの時の私の変化にリボンは気付いていたのかもしれない。

2 - 2 別れ道

京子に気持ちを打ち明けられた時、私の存在がどれだけ彼女に不安を与えていたのかと言うことがわかった。改めて、沢田くんと距離の取り方を見直すべきだと思った。

・・・はずなのに。

「助かったよ。俺だけじゃ鍋の材料何にしているのかわからなかったからさ。」

「どう、いたしまして。」

何故か私は、休日に沢田くんとスーパーで買い物をしていた。

遡ること15分ほど前。親から買い物に行けと言われてスーパーに来たら、野菜コーナーで何やら悩んでいる様子のススキ色の髪の少年を見つけてしまったのだ。

「鍋って何入れるんだろ。トマト鍋ってあるし、トマト入れていいのかな？あれ？トマト鍋って何入ってるんだろ。ピーマン？」

「何でピーマンチョイスしたの!？」

「あれ？西崎さん。」

「あ・・・。」

とまあ、思わず突っ込んでしまったら何故か鍋の材料の買出しに付き合わされたわけだ。まさか沢田くんに突っ込む日がくるとは思わなかったな。だって沢田くんって突っ込みでしょ？何であたしに突っ込まれてんの？なんだかどつと疲れてしまつて、私は沢田くんに気付かれないようにこつそりため息をついた。

「西崎さんの家は今日は何食べるの？」

「うちはハンバーグ。」

「俺の家は今日獄寺くんや山本を誘つて鍋パーティなんだ。」

「いいね。」

嬉しそうに言う沢田くんを見ていたらなんだか自分の中にあつたもやもやした気持ちが晴れていくようだった。こういう時、沢田くんは不思議な人だかつて改めて思う。

「沢田くんって肉ばっかり食べて野菜食べなさそうだね。」

「食べるよ！そんなに子どもじゃないから！」

「あはは。」

「信用してないでしょ！？」

沢田くんのこのゆう会話はすごく好きだ。よくわからないけど、すごく安心する。沢田くんは不思議な人。笑つてくれるとほつとするし、傍にいと安心する。何で獄寺くんや武が君を大事に思うのか、何で、京子が君に惹かれたのか。今なら、なんとなくわかる気

がする。

「ありがとう、沢田くん。」

「何が？」

「ディーノのこと。沢田くんがいたからディーノに会って話ができ
きたし、一杯泣いてすっきり出来た。だから、ありがとう。」

沢田くんにはたくさんお礼を言わなくちゃいけない。リボーンの話
だと、ディーノは沢田くんに会いにちよくちよく日本を訪れていた
らしい。つまり沢田くんがいたから私はディーノに会うことができ
たのだ。そして、沢田くんがいたから私はディーノに会ったことを
後悔しなくて済んだ。

「ありがとう。」

ディーノに出会わせてくれて、後悔なく、別れさせてくれて。・・・
ありがとう。

私の突然のお礼を沢田くんは瞬きもせずじっと聞いていた。

「・・・、沢田くん。」

「ん？」

「沢田くんは手放さないでね。」

唐突な私の言葉に沢田くんは不思議そうに目を瞬いた。私は握る拳
に力を入れ、声が震えないように気をつけながら言葉をつむいだ。

「大切な人が出来たら、放さないであげて。置いて行ったりしないで。」

京子を、置いて行かないであげて。そんな気持ちを込めて言った言葉に沢田くんは目を見張って聞いていた。

「変なこと言っでごめんね。じゃあ、また月曜日に。」

「……うん。またね。」

別れ道に来て、私は沢田くんの手を振った。沢田くんも笑って手を振ってくれた。互いに互いの道を進んでいく。交わることはないこの道は私と沢田くんのようにだと思った。

ねえ、沢田くん。私は少し、怖くなった。君の隣にいられたら、私の心は変わってしまう気がして。リボーンの忠告が私の頭に鳴り響く。距離を間違えるな、と。

2 - 3 自覚

私が気付かなかっただけで心は静かに、緩やかに変化していたんだ。それは自覚するとともに急速に形を変える。形を変えた想いは名前を持つ。

朝から降り続く雨は私を憂鬱にする。そもそも今日は調子が悪いのだ。頭ガンガンするし。だというのにこの空模様。気分が沈む理由はそれだけで十分だ。

「ちよつと千景。めっちゃ眉間に皺寄ってるんだけど。」

「いつも通りですけど。」

「どんないつも通りだ。」

花に呆れたようにため息をつかれる。眉間に皺を寄せている気なんてなかったのだが頭が痛いせいで自然と寄っていたらしい。

「朝から頭痛いの。あゝ、だめだ。やっぱ保健室行ってくる。」

席を立つと頭がクラツとして一瞬視界が歪んだ。

「ちよ、ちよつと大丈夫？」

ふらついた私に花が心配そうに声をかける。大丈夫、と伝えて私は教室を出た。偏頭痛というものだろう。雨の日は大抵頭が痛くなるし。少し寝れば大分よくなるはずだ。私はふらつきながら保健室まで向かった。そしてふと気付く。

「あの変態保健医がいたら面倒くさいな。」

鈍い痛みを訴える頭を抱え、あの変態保健医ことシヤマル先生を思い浮かべる。絶対何かしら絡んでくるはずだ。想像すると余計に頭が痛くなってきた。私は深々とため息をついた。意を決して保健室の扉を開くと予想に反して静かな保健室が私を出迎えてくれた。よく見れば扉に張り紙がしてあった。

『恋のハンティングに行ってくるぜ。』

それでいいのか、保健医！

心の中で突っ込みながらも、まあいいにこしたことはないと思いの息を吐く。

「失礼します。」

誰もいないけど一応挨拶をしてから入室した。上履きを脱いでベッドに上がり込む。頭が痛いせいか眠気はすぐにやってきた。

夢と現を彷徨い始めた頃、ゴロゴロ、という地を這うような音に私は目を覚ましてしまった。

止せばいいのに布団から出て、カーテンを開け、窓を見る。瞬間、窓から見える景色が青白く光り、再び地を這うようなあの恐ろしい音が聞こえてきた。雷が鳴っているかと理解するよりも早く、私はカーテンを閉め、頭まですっぽりと布団を被った。

光も音も通さぬように目を瞑り、耳を塞いだ。カーテンを閉め、窓

から背を向けているおかげで光は見えないが音だけはどうしても聞こえてきてしまう。音が鳴るたびに震えながら私は必死に眠ろうとした。しかし緊張状態のせいかさっきまでであった眠気が何処かに行ってしまったらしい。私は声を押し殺して布団の中で震えているしかなかった。

ぼんぼん。

突然、布団の上から誰かに優しく体を叩かれた。まるで子どもを寝かしつけるようにぼんぼん、と優しく。恐る恐る顔を出すとそこには優しい表情で私を見ている沢田くんがいた。

一瞬、周りの音が消えた。ざわり、心の騒ぐ音だけが聞こえる。

「な、んで、ここに？」

「黒川が、西崎さんが保健室に行ったって聞いたから様子を見に来たんだ。」

「そう。」

会話を始めると同時に私の世界に音が戻ってきて、雷の音に私はビクリ、と体を震わせる。

「雷、怖いの？」

「……………うん。」

弱さを見せるようで肯定することに戸惑ったけど、雷が鳴るたびにこうして体を震わせているのだ。誤魔化したところで強がりだと思

抜かれることは間違いない。悩んだ結果、私は肯定した。複雑な私の心境を知ってか知らずか、沢田くんは先ほどよりも優しい表情で笑った。

また、ざわり、と心が騒ぐ。

「そつだ。ちょっといい？」

「え？」

沢田くんは私の枕元に座ったかと思うと腕を引き、私を抱き寄せた。

「！？」

「こうすれば、俺の心音しか聞こえないでしょ？」

トクン、トクン、と心地よい音が耳元で鳴っている。私がかくり、と頷けば沢田くんは寒くないようにと布団で私をくるんだ。

「うちのチビ達がさ、やっぱり雷苦手で。こうしてやると安心するらしいんだ。」

「私はそのおチビさんたちと一緒にわけてね。」

「あはは。」

沢田くんの足の間に座らされ、抱き寄せられているこの状況はかなり恥ずかしくてドキドキするけど、それと同時に安心もする。乾いた笑みを浮かべる沢田くんは苦笑しながらも胸に耳を当て、彼の心音を聞く。不思議ともう、雷は怖くなかった。そのおかげか、再び

眠気がやってきた。

「いいよ、寝ても。眠るまでこうしてるから。」

暖かい手が頭を撫でてくれる感覚に酔いしれながら、私は目を閉じた。あんなに怖かったのに今はただ安らかだ。

いつからだろう、この手をディーノと重ねなくなったのは。

私は当初、沢田くんにディーノの姿を重ねていた。明るい笑顔、人を惹きつける不思議な魅力、時折見せる大人びた表情……。その全てがディーノに似ていて、私は沢田くんを彼を重ねてみていた。だから彼に対して感じる感情はディーノに向けた私の想いだった。

でも、いつからか、沢田くんの笑顔に、大人びた表情に、優しい笑みに、ディーノが重なることはなくなった。

私は沢田くんを沢田綱吉という一人の存在として見ていた。

まどろむ意識の中で私は何度もどうしてかと自分に尋ね続けた。そして、意識が途切れる直前、理解する。

私は、沢田くんが好きなんだ。

想いは自覚するとともに急速に形を変え、そして明確なものになった。

2 - 4 警告

互いの道が交わることはないと思っていたはずなのに。どうして好きになっちゃったんだろう。

目が覚めた時、私は布団の中で横になって眠っていた。沢田くんが傍にいたなんて嘘みたいだ。でも、確かに彼はここにいて、私は彼の腕の中、心音を聞きながら、眠りに落ちたのだ。沢田くんを好きだと自覚して。

ぐっすり眠ったおかげか、頭痛は消えていた。布団から出て、大きく伸びをする。雨音がしないということは雨も止み、雷もおさまったのだろう。ほっと息をつき、私は教室に戻る。

「おかえり、千景。うん、顔色よくなったね。」

「ご心配おかけしました。」

わざとおどけた様にして言えば、全く、と花に呆れられた。授業が始まるまで花や京子たちと他愛もない話をして笑った。だけど、私の視線は時折、沢田くんの方へ向いていた。どうすることもできないこの想いを、私はどうやって消化すればいいんだろう。

放課後、すぐに帰る気にはなれなかった私は教室の窓から夕日の沈む景色を眺めていた。

「帰らねえのか？」

「武……。」

振り返った先にいたのは野球のユニホームを着た武だった。まだ、部活中のはずなのだが。

「さぼり？珍しいね。」

「千景に話があったからな。」

「……？」

武に改めてされる話が思いつかず、私は首を傾げる。そんな私に困ったように笑い、武は私に歩み寄ると真剣な表情で口を開いた。

「ツナを、好きになるなよ。」

「……。」

ドクン、と心臓が大きく鼓動を刻む。動揺を悟られぬように瞳は真っ直ぐ武を見据えた。

「リボンと同じことを言うんだね。武も忠告に来たってわけだ。」

今思えば、リボンはこうなることを分かっていたのかもしれない。私は、距離を間違えたのだろうか。

だから、沢田くんを好きになってしまったのだろうか。

「一回言われてんならこれは警告だ。……好きになってもお前がつらいだけだ。」

“好きになるな。ツナを傷つけないならな。”

「……私が沢田くんを好きになったら沢田くんを傷つけるのかな？」

「千景？」

視線を外し、現実味のない声で話す私を武が訝しげに呼ぶ。

「傷つけてしまう？」

優しいあの人を傷つけてしまう？

「……ああ。」

じゃあ、私の想いは知られちゃいけないね。

「千景、お前……。」

「ねえ、武。背中、貸して。」

私の言葉に、武は無言で背を向けた。その背に顔をうずめる。私の想いが誰かを傷つけるのならこんな想い失くしてしまえばいい。奥底にしまって、出てこなければいい。

ほろり、と私の瞳から涙が零れた。

2 - 5 距離

距離を置くのは至極簡単なことだった。それは私と彼との関係の希薄さを表しているようで、とても寂しい。

「おはよう、千景。今日もぎりぎりだね。」

「早く来ることより睡眠を選びました。」

私は私に沢田くんとの距離を置くと決めたあの日から登校する時間を変えた。遅く来れば、以前のように沢田くんに勉強を教えることはない。それに私がいなければ京子が教えるだろうし、沢田くんと京子の距離を縮めるなら一石二鳥だ。

10分休みや昼休みは京子や花、美砂緒と共に女子話に話を咲かせていた。放課後のバイトもコーヒートの練習を理由にあまりカウンタ―で無駄話をしないようにした。別に沢田くんを避けるつもりはないので話しかけられれば話すし、挨拶もする。

ただし、接点を減らしたただけだ。

それだけでも随分と沢田くんは遠くの人になってしまった。こうしてみると、私がどれだけ自分から沢田くんに関わりに行っていたのかがわかる。自分がどれだけ、沢田くんと希薄な関係にあったのかがわかる。クラスメイトよりは親しいかもしれない。でも、友達と呼べるほどの絆で結ばれている訳でもない。ただ、クラスが一緒で、私の好きだった人が沢田くんの知り合いだったというだけのことだ。

「しけた面してるな、千景。」

「うるさい、リボン。」

エスプレッソを運びに行つて言われた言葉にイラツとしながらも努めて冷静な声で返す。そんな私の態度に何が楽しいのかりボンはニヤリ、と笑みを浮かべる。

「だからいったじゃねえか、距離を間違えるなつて。」

まるで私の気持ちを見透かしているかのようなリボンの物言いに、ぎりつと奥歯を噛みしめる。これ以上、この赤ん坊と話したくなくて、私は背を向けた。

カランコロン。

店の扉が開く音がして、私はそちらに顔を向ける。

「……いらつしやいませ。」

黒いスーツを着た沢田くんだった。私の姿を見ると少し困ったように笑った。

沢田くんは仕事で来る日はいつもどこか気まずそうに困ったように笑う。それを寂しいと感じるのはおかしいだろうか。

沢田くんとリボンが4人掛けの席に座つて間もなく、相手方の人々が2人やってきた。こちらもやはりスーツ姿。見るからに怖そうな人たちばかり。彼等と沢田くんにどんな関わりがあるのか、私には想像もつかない。

「お待たせいたしました、コーヒーです。」

コーヒーを届けに行くと、沢田くんとりボーンの姿がなかった。どこに行っただろう、と思いながら2人の男の前にコーヒーを置く。

「何だ、このコーヒー。味がねえぞ。」

一口飲んだ奥の男が顔を歪めて言った。でも穂月さんが作ったコーヒーに限ってそんなはずはない。それでも客がそう言っているのだから謝らなければいけない。

「申し訳ありません。お取り換えします。」

奥のコーヒーを取ろうと伸ばした腕を手前の男に掴まれた。

「おい、ねえちゃん。取り換えるだけで済むと思ってんのかよ。こんな不味いコーヒー普通にやしやがって。出すもん出してもらおうか。」

「痛っ!」

手首を捻じり上げられ、私は顔を歪める。コーヒーが不味いなんて絶対嘘だ。時折こうしていちやもんをつけてくる客がいるのだ。

「離してください! だいたい、本当に不味いんですか? このコーヒーはリボンだって認めてるんですよ!」

「ああ? 客の言うことが嘘だって言いてえのか?」

「違つのか？」

「「!!」」

いつの間にか帰ってきて向かい側の席に座っているリボーンに私も男も驚いてそちらを見る。無表情に男を見るリボーンは正直怖い。

「その手を離してください。」

男の腕に男性にしては少し細めの腕が伸び、つかんだ。顔を上げれば、普段は優しい笑みを浮かべている沢田くんが無表情で立っていた。

「離せ。」

沢田くんが掴んでいる手に力を入れると、男からうめき声が上がリ、私の手首から手が離れた。男を冷ややかに見ていた沢田くんの瞳が劣わるような色に変わり、私を見た。

「大丈夫？」

そっと手を取られ、立ち上がる様促される。掴まれた手首が赤くなっている。結構強い力で掴まれていたらしい。それを見た沢田くんは眉間に皺を寄せ、私に背を向け、男に向き直った。

「一般人に手を出すな。」

思わず、目の前の沢田くんから顔を背けた。首を絞められているみたいに息苦しい。

「交渉し直しだな。おい、ツナ。俺は千景を手当てして来るから取引終わらせておけよ。」

「わかった。」

「行くぞ、千景。」

先を歩くりポーンに私は無言でついて行った。奥にいた穂月さんに事情を説明し、私はリポーンとスタッフルームの中に入った。

「何、沈んだ顔してんだ。」

「・・・別に。」

「千景。」

幾分厳しめな声で名前を呼ばれ、顔をあげる。情けない顔をしているのだろう。リポーンは少し驚いた顔で私を見ていた。

「私わざわざ距離を取らなくても、沢田くんと私には決定的な距離があるじゃない。」

私の知らない沢田くんの秘密。それがあつ限り私と沢田くんの距離は縮まらない。いや、知つたところできつと縮まない。だつて・・・。

「沢田くんは私との間に線引きをしてる。」

私を一般人と呼んだ。友達でも、クラスメイトでもなく、一般人と。沢田くんと私を別のものと線引きをした。

それは秘密を知っても知らなくてもきつと変わらない現実。

2 - 6 消したい思い

私は二度と、想うだけの恋なんてしない。実ることがないのなら、その恋は諦める。ずるいかもしれない。でも、立ち止まらないためにも無理矢理にでも前に進むしかないのだ。

「ちか、最近合コンに行ってるって本当？」

昼休みの屋上。久しぶりに美砂緒と2人でお昼を食べている。

「行ってるよ。いい出会いがあればいいと思って。」

何でもないことのように答えれば美砂緒は訝しげな顔で私をじつと見てきた。中学からずっと一緒にいる美砂緒には私の今の行動は不可解でしようがないのだろう。

「自暴自棄に見える？」

「・・・うん。」

言わずらそうに頷く美砂緒に私は苦笑する。らしくない行動は随分この友人に心配をかけてしまったらしい。

「そつだね、自暴自棄気味かも。」

自嘲気味な笑いがこぼれる。ここしばらく花に誘われるがまま、合コンに参加した。でも、いい出会いなどあるわけもなく、私は営業スマイルを振りまいて疲れて帰るのだ。それでも少しでも沢田くんの事を忘れられるなら、あの悲しい気持ちを忘れられるなら、それ

でよかったから。

「もし気分転換で合コンに行くなら、やめよう？それよりもさ、私と遊ぼうよ！ね！」

京子とはまた違う愛らしい笑顔に私の頬も自然と緩む。

「ありがとう。」

合コンに行くか行かないかは別として、美砂緒の気持ちは嬉しかった。

結局、その日も花に連れられて合コンに行った。そこに見覚えのある顔があつて、私は目を反らした。今日の合コン相手は黒曜高校だったらしい。

そう、何故か骸さんがいたのだ。

骸さんに会ったのはディーノの婚約パーティーで一度だけ。独特の雰囲気と髪型だったので覚えている。絶対こういう所にくるタイプじゃないのに。

「は、花、私、今日はもう帰ってもいいかな？」

「は？来たばかりじゃん。」

「えっと、あれだ！頭が痛くなってきたの！うん。てことで、じゃあねー！」

「ちょっと、千景ー！」

花の制止も聞かず、私は挨拶もそこそこに鞆を持って店を飛び出した。

「びつくりした〜。何であのパイナップルがいるのよ。」

「誰がパイナップルですか。」

「!?!」

振り返ると骸さんが笑顔で立っていらっしやった。

「・・・こんばんは〜、骸さん。」

「こんばんは、お姫様。」

冷や汗をだらだらと流しながら、私は骸さんに捕獲された。

「あ〜、骸さんは何であんな所にいたんですか?」

「おや、可笑しいですか?」

「物凄く。」

即答すれば、骸さんは楽しそうにクツクツフ、と奇妙な笑い声を上げて笑った。絶対変だよ、この人。ていうか、怖いよ、この人。

「僕はたまたま君が参加すると聞いたので参加しただけですよ。」

「何で?」

「ボンゴレのお姫様に何かあつたら困りますからね。」

よくわからない理由に私が首を傾げると、君はまだ知らなくていい、と穏やかな笑顔で言われた。そんな顔も出来るのか、としばしその笑顔に見惚れる。

「骸さんはそうやって笑うとすごく素敵ですね。」

私の言葉にしばらく呆けた顔をした後、骸さんは嘖き出すように笑った。

「何で笑うんですか〜!？」

結構いいことを言ったと思っただけに笑われると変なことを言ってしまったのかと若干焦る。そんな私に彼はいえいえ、と首を振った。

「お褒めに預かり光栄ですよ。」

芝居がかった口調に私は少々不貞腐れる。なんだか遊ばれてるみたいだ。そういうのは沢田くんの役割なのに。・・・何ですぐ沢田くんに繋げちゃうのかな。自然とため息が零れる。

「どうしました? 沢田綱吉と何かあつたんですか?」

「・・・何も。どうせ私は部外者ですから。」

拗ねたような口調に自分でも呆れてしまう。拗ねるような事じゃない。沢田くんはきっと私を巻き込まないために線引きをしたただけだから、拗ねることじゃない。

「知りたいですか？沢田綱吉の秘密を。」

「・・・知りたいです。でも、知っても何も変わらないと思うから、知らなくていいです。」

そう、何も変わらない。いや、知ってしまった方が彼は遠ざかってしまうのかもしれない。だって・・・。

「だって、知ったとしても沢田くんは私を置いて行ってしまおうと思うから。」

一瞬驚いた顔をした骸さんはさっきと同じ穏やかな笑みを浮かべた。

「置いて行かれるのは、嫌ですか？」

「・・・はい。」

置いて行かれるのは、もう嫌だ。ディーノの時のように待ち続けるのはもう嫌だ。あんなに寂しくて、苦しい思いをするのはもう嫌だ。だって、結ばれないという結末を私は知っているから。今度はもう、待てないと思う。

待つのは、もう嫌だ。

置いて行かれるのは、もう嫌だ。

俯いた私の頭を撫でる骸さんの手は思っていたよりもずっと、暖かかった。

2・7 小さな幸せ

一人で帰れると言った私を骸さんは送ると言っただけで帰ってきた。骸さんといるとまるで自分が子どもみたいでちよっと悔しくなる。骸さんに気付かれないようにこっそりため息をつく、前方に人影が現れた。ていうか、沢田君だし。ていうか、沢田くんの家の前だし。

「あれ？西崎さん・・・と、骸？」

「やあ、こんばんは。沢田綱吉。」

「・・・こんばんは、沢田くん。」

につこり、沢田くんに笑顔で挨拶して私は勢いよく骸さんの制服の袖を引っ張った。降りてきた骸さんの耳に小声で訴える。

「ちよつと、何で沢田くんと遭遇してんのよ！絶対わざとここに来るように誘導してきたでしょ、あんた！」

「何のことですか？僕は君についてきただけですよ。」

胡散臭い笑みを浮かべる骸さんに本気で殺意が芽生えた。頭撫でてくれた時のあの優しさは何処にいったんだ、このパイナップルめ！

「何で骸が西崎さんと一緒にいるんだよ。」

合コンで会いました。なんて口が裂けても言えない。仮にも好きな人に合コンに行っていたなんて知られたくない。

「たまたまですよ。たまたま。」

骸さんの曖昧な答えに沢田くんは眉を寄せたけど、それ以上は追及しなかった。たぶん、骸さんがそれ以上は説明しないと分かったんだろう。

「にしても丁度いい所で会いましたね。千景のことは沢田綱吉に任せるとしましょうか。僕は用事があるんでね。」

私と沢田くんの返事も聞かずに骸さんは踵を返して帰って行った。丁度いいも何も、人が上の空なのをいいことにお前がここまで連れてきたんだよ！骸さんの背中に向かって心の中で罵倒し続けた。

「何で、あいつまで……。」

「え？」

「いや、何でもない。あ、送るよ。」

こっちでしょ、と言って歩き出す沢田くんには私は一瞬何を言われたのかわからず呆けていたが、すぐに我に返り、彼の背中を追いかけた。

「い、いいよ！だって沢田くん、用事があつて家を出てきたんでしょ？私なら一人で帰れるから！」

「コンビニに行こうと思ったただけだから。それに、西崎さんとうして話すのは久しぶりだし。」

「……ありがとう。」

お願いだから、そんな笑顔でそんなこと言わないで欲しい。沢田くんにとっては何でもないであろうその言葉にも私の心は高鳴ってしまった。素っ気ないお礼しか言えなかった。

「あの日はごめんね。」

「え？」

「俺の仕事相手に絡まれた日。怖かったでしょ？」

「・・・ああ。大丈夫だよ。今までにも何度かあったもの。腕捕まれたのは初めてだったけど。」

それよりも、沢田くんに線引きされたことのほうがずっと悲しくて、つらかった。踏み込んだら全部失くしてしまいそうで怖かった。

「ごめん。」

「沢田くんが謝ることじゃないよ。」

「でも・・・。」

「沢田くんの知り合いだろうが、仕事相手だろうが、ああいう行動を起こしたのはあの人たちなんだから沢田くんが謝ることじゃないよ。人のしたことにまで責任を感じる必要はないよ。それに、沢田くんは助けてくれたじゃない。」

戸惑いの表情を浮かべる沢田くんには私は苦笑する。この人はどれだけ優しいのだろう。被害を受けた私が気にするなど言っているのだ。

だから気にする必要なんて、責任を感じる必要なんてないのに。

「ばかだな、沢田くん。そんな顔されたお礼言っのが戸惑われちゃうよ。」

「俺、そんなに変な顔してた？」

「うん、とっても。」

真顔で大きく頷けば、沢田くんは苦笑した。まだ少し元気がないけど、いつもの沢田くんの笑みだ。

「助けてくれてありがとう、沢田くん。」

「どういたしまして。」

少し照れた様子で私のお礼を受け止める沢田くに自然、私の頬も緩む。必死に遠ざけようとしていたのに、遠ざかっていたのに。久しぶりに話す沢田くんとこの会話はとても楽しくて、笑う沢田くんを見るのは幸せだった。たとえこれが今だけであっても、いや、今だけだからこそ、この幸せな時を心に刻みつけたい。

私のことなんて放っておいてくれればいいのに。どうして、放っておいてくれないの。

「何で、お前がここにいるんだぴよん！」

「犬、煩い。」

まったりティータイムを楽しむ中、騒がしい声が部屋に響く。

ここは黒曜ランド。骸さんのねぐらの様な場所だ。

そこにはクロームもいて、あと犬と千種って人とも知り合った。犬は語尾に「ぴよん」を付ける変人で、千種は「面倒くさい」が口癖。変人って言ったら怒られそうだから心の中だけにとどめておこう。

「何でって、遊びにきたんだよ。」

最近此処へ来ることが日課となりつつある私は犬ににっこり微笑んだ。その笑顔が気に入らなかったのか犬は余計に騒ぎだした。

「ボンゴレの人間がここにくんな！」

「……。」

だから、ボンゴレってなんだよ、と心で突っ込みつつ口には出さない。何度か聞いたことのある「ボンゴレ」という言葉。たぶん沢田

くんに関連しているのだと思う。沢田くんに関連しているのならば、私には関係ないと思う。

「犬、千景は違うよ。」

「うるへー！お前は出しゃばるんじゃないやねえぴょん！」

クロームに向かって暴言を吐いた犬に私は持っていたカップを投げつけた。カップは犬の頬スレスレを通り、奥の壁に当たって砕けた。

「ダメでしょ、犬。女の子に暴言吐いちゃ。」

「す、すいません。」

「大人しくこつちで座ってなさい。」

につこり笑って言えば、犬は素直に私の隣に腰を下ろした。

「ごめんね、クローム。またカップ割っちゃった。」

「気にしないで。」

「謝るなら最初から投げないで欲しいんだけど。」

千種の冷静な突っ込みに私は頬を膨らませる。彼等といるのはとても楽しい。並高のみんななどの会話の中には必ず沢田くんが出てくるけど、ここではあまり話題に上がることはない。だから楽しかったし、安らいだ。

「楽しそうな所申し訳ないですがね、千景。お迎えですよ。」

「え？」

やっと顔を出したと思ったたら骸さんは後ろに沢田くんを連れていた。状況が理解できず私は目を瞬かせる。何で、沢田くんがいるの？そんな意味を込めて骸さんを見上げると、彼は少し困ったように笑った。いつも人を小馬鹿にした態度をとる骸さんにしては珍しい反応に私は余計に戸惑う。

「帰るよ、西崎さん。」

「え？」

腕を引つ張られ、私はクロームたちにろくな挨拶も出来ないまま黒曜ランドをあとにすることになってしまった。そんなことよりも、なんだか沢田くん……。

「……怒ってる？」

ぴたり。沢田くんの足が止まった。掴まれた手はそのままに、沢田くんがこちらを振り返る。眉間に皺を寄せ、厳しい顔つきで私を見る。その瞳の冷たさに私はびくり、と身を縮ませた。

「何で、黒曜ランドになんて行ってるの？」

「たの、しいから……。」

そんな答えでいいのかわからないけど、私は緊張しながらそう言葉を紡いだ。

「あそこは結構危ない場所だっけ知ってるよね？」

沢田くんの言葉に私はこくり、と頷く。黒曜ランドは不良のたまり場として有名だ。今は骸さんたちがあそこを使っているからそう危なくはないらしいのだが、それでも安全とは言えない場所だ。

「それに、何で骸に会いに行くのさ。」

「どうして？骸さん、いい人だよ。」

「骸がいい人っていうのは語弊があると思うよ。」

「何で、そんなこと言うの？」

どうして冷たい瞳で、声で、そんなことを言うの。どうして、私の知らない顔をするの。

「巻き込まれたらどうするつもり？」

巻き込まれる？何に？わからない。

「お願いだから、もう骸に会いに行くのはやめてよ。」

何にも教えてくれないくせに、何でそんなこと言うの？

「やだよ。折角仲良くなったんだもん。これからも行く。」

「西崎さん！」

「何でダメなの！？私が何処で何をしようが沢田くんには関係ない

じゃない！」

「関係なくないよ！危ないと分かってるのに、友達を行かせる訳にはいかないだろ！」

声を張り上げれば、沢田くんはそれ以上の声で返してきた。彼は私を友達と言う。

何も知らない私は友達？君に一般人と線引きされた私は友達と言えるの？

「どうして、放っておいてくれないの・・・？」

呟くような小さな言葉。沢田くんにはもしかしたら聞こえていないかもしれない。目頭が熱くなって、泣きそうだ。

「私の事は放っておいてよ！必死なの！忘れるために、前に進むために必死なの！それにはあの場所が一番心地いいのよ！」

沢田くんの傍にいと心が苦しいと悲鳴を上げる。優しさに触れる度、笑いかけられる度、それが私だけに向けられたものではないと知ると悲しくて、悲しくて、頭がおかしくなりそう。だからもう、放っておいて欲しい。

「友達だつて言うなら、そう振舞うようにするから！だからもう放っておいてよ！」

硬直する沢田くんの手を振り払い、私は駆けだした。息が切れて苦しくても、止まらずに走った。そのうち、足がもつれて私は派手に転んだ。起き上った時初めて、頬に温かいものが伝っていることに

気がついた。どうやら私は泣いているらしい。

何で？何か悲しかったのだろうか。わからない。

ああ、でも、そうだ。悲しいのかもしれない。だって、胸がこんなにも痛い。

沢田くんと言い争いになってから、私はずっと沢田くんを避けている。なのに、彼が話しかけようとすることから段々と形振り構っていられなくなつて、沢田くんが近づきそうな気配を感じたら教室から逃げ出すなどあからさまな態度をとるようになっていた。

「千景、ツナと何かあつたのか？」

珍しく家に遊びに来た武は首を傾げて尋ねてきた。沢田くんの話などしたくない私は顔を顰める。

「別に何も無い。沢田くんと関わらない方が武だって嬉しいでしょ。」

拗ねた子どものように顔を背ける私に武の苦笑する声が聞こえてきた。その声はまるで、何をそんなに頑なになっているのか、と言われているような気がした。

頑なに、なっているのだろうか。

これ以上好きにならないように、これ以上自分を傷つけないように、頑なに沢田くんを拒んでいるのだろうか。これが正しい距離なのだろうか。どれだけ頭で考えても答えが見つからなくて、私はため息をついた。

「ツナも、最近ため息が多いんだ。」

「・・・そう。」

そりゃ、友達だと思ってた人からこんなにあからさまな拒絶を受けたら誰だってへこむよね。でも、今の私にはどうしようもない。

「俺はさ、莫迦だからよくわかんねえけど、今の状態が苦しいなら、苦しくなくなる方法を探せばいいと思うぜ。」

「何それ。」

苦しいから沢田くんを避けているんじゃないか。

・・・じゃあどうして、今も苦しいままなのだろう。

「千景、前に俺が言ったことは忘れていいぞ。」

「沢田くんを好きになるなって？」

「おう。忘れる。それで、思うままにしろ。」

お前はいつも溜めこみすぎだ。そう言って、武は帰ってしまった。好きにしろ、と言われた私はただ戸惑うばかりだ。

私は、何がしたいの？どうしたいの？

別に、沢田くんを避けたいわけじゃない。前みたいにたくさん話したい。いつもの笑顔で笑って欲しい。

好きでいたい。

たとえば、立つ場所が隣じゃなくてもいい、一般人だっていい、それ

でも、一緒にいることを許して欲しい。好きでいたい。

こんな我儘な私だけど、それでも願うなら、沢田くんにも私を好きになって欲しい。隣に立って、手を繋いで歩きたい。ずっと、ずっと……。

2・10告白

自分の心を偽るのはもう嫌だから。だから私は、はじめをつけよ
うと思っ。

「京子、ちょっと話したいことがあるんだけど、いいかな？」

なるべく普段通りを心がけながら私は京子に声をかけた。

断って欲しい。

話を聞いて欲しい。

二つの想いがせめぎ合う。これから彼女に言わねばならないことを
考えると私の胸中は複雑だ。

「うん。いいよ。」

ふわり、と微笑まれると余計に胸が苦しくなる。私が話すのは、大
事な友達である京子を傷つけることだ。それでも、もう心を偽るの
をやめると決めたから。私は京子に話さなければならぬ。

場所を変え、私は京子と向き直った。昼休みの屋上は込み合うが、
放課後に屋上が上がってくる人なんて告白する人ぐらいだ。だから
私たちの傍には誰もいない。

「どうしたの、ちかちゃん。とっても難しい顔してる。」

ごめんね、京子。無邪気な彼女の笑みを見ていると胸が苦しくなる。

逃げ出したくてたまらなくなる。

「ごめん、京子。」

「ちかちゃん？」

「私、沢田くんが好きだよ。」

私の告白に京子は大きな目を見開き、瞬きせずに私を見た。そして暫くすると悲しげに微笑んだ。

「そんな気がしてたんだ、最近。」

ツナくんのこと、あからさまに避けていたから。そう言っただけで京子は黙った。唇を震わせて困ったように微笑んだ。

どうして、そんなに泣きそうな顔をするのか、私にはわからなかった。確かに、私の告白は京子を傷つけるものだけど、沢田くんの心を私が手に入れたわけではない。どちらかと言えば、京子の方が沢田くんと近い場所にいるのに。

「私の方こそごめんね。ちかちゃんがツナくんを避けてたのって、多少なりとも私のこと思ってくれたからでもあるんでしょう？」

素直に頷いていいものか悩んだが、京子の瞳は全てお見通しだ、と言われているような気がして、私はこくり、と頷いた。すると彼女は再び、ごめんね、と謝った。

「私がちかちゃんを追い詰めてたね。」

「違う！違うよ。私が、弱かったの。だから、余計に傷つけたの。」

沢田くんのこと、京子の事も。

「どうして、人の想いって上手くいかないんだろうね。」

「……。」

朗らかに微笑む京子には先ほどの泣きそうな表情は何処にもなかった。

「ちかちゃん。ツナくと、早く仲直りしてあげてね。」

そう言つて京子は綺麗な、綺麗な笑顔で微笑んだ。私は言葉を紡げずに、黙って頷いた。

避ける癖がついてしまったのか、京子に背中を押してもらったというのに、私は未だに沢田くんに声をかけることが出来なかった。

「はあく。あたしってこんなに意気地なしたっけ……。」

「しょうがないよ。元に戻るの難しいもの。」

すっかり私の逃げ場と化している屋上でため息をついている私を京子が話を聞いてくれる。

「ちかちゃん、そんなに気を張ることないよ。急ぐことないんだから。」

頑張れ、そう言って彼女は笑う。京子だって沢田くんの事が好きなのに。私たちは言わばライバル関係だ。それでも京子は応援してくれる。その胸中はきつと複雑だろう。だけどそれを表に出すことはない。京子にいらぬ気を使わせてしまっていることが心苦しい。

「随分暗い顔をしていますね、千景。」

「うわっ！パイナップル！じゃなくて、骸さん。」

帰り道、突然現れた骸さんに私は物凄く驚いた。思わず言い間違えるくらい。

「千景、殴っていいですか？」

笑顔で言われて私は必死に首を横に振った。マジで殴られそうだった。それでそれは避けたい。骸さんに殴られたら死んじやいそう。雲雀さん並に強いつて聞いたことがあるもの。

「全く、君は。人が心配しいて来て上げたというのに。ま、思ったよりは元気そうだなによりです。」

そう言つて彼は優しく微笑むと私の頭を優しく撫でた。子ども扱いする彼に恥ずかしさ半分、嬉しさ半分で大人しく撫でられていた。その手がびたり、と止まり彼は両手を上げた。

「ただ慰めていただけですよ。」

骸さんの発言の意味がわからず私は首を捻る。すると後ろからそれに答えが返つて来た。

「何も言つてない。」

その声に私の方がびくり、と肩を揺らした。聞きたくて、聞きたくてしようがなかった声。でも、どうして彼がここにいるのだろう。

「じゃあそんな目で睨まないでくれませんか？空気も刺々しいですじ。」

「……………」

沢田くんは無言で近づいてくると私の腕を引き、自分の背に庇うよ

うに立った。

「沢田くん？」

状況が読み込めない私は目を瞬かせながら事の成り行きを見守るばかりだ。沢田くんと骸さんの間には火花が散っているように見えなくもない。それだけ空気がピリピリしているのだ。

「で、何でお前がここにいるんだ？」

「千景に会いに来ただけですよ。」

小首を傾げてにつこり笑う骸さんは一般女子が見たら惚れ惚れしそ
うだが、私には黒い笑顔にしか見えない。そして私からは表情が見
えない沢田くんも笑っているような気がした。骸さんと同じ真っ黒
な笑顔で。ブラック沢田くんなんて見たいような見たくないような
。。。

「そもそも僕が彼女とどうしようと思わないと思つのですが？」

「お前、わざと言ってるだろ。」

苦々しい沢田くんの声に骸さんは楽しそうに笑った。

「残念ながら騎士のお出ましのようなので僕は帰りますよ。それで
は、千景。また遊びに来てくださいね。」

「あ、はい。」

沢田くん越しになつこり微笑まれ、私は思わず頷いていた。それと

同時に沢田くんがため息を吐いたのが聞こえた。そう言えば、黒曜には遊びに行くようになって言われていたんだった。

「あ、あの沢田くん。」

恐る恐る声をかけると沢田くんが私の腕を掴んだままくるり、とこちらを向いた。

「……………」

怒っているのでは、と思っていた沢田くんはとても穏やかで優しい笑みを浮かべていた。思わず、声を失ってしまうくらい、私のその表情にくぎ付けになっていた。

「やっと捕まえた。」

嬉しそうに。とても嬉しそうに言う沢田くんに私の瞳からほろり、と涙が一筋流れた。

「……………」

「ごめん、なさい。」

震える声で最初に出た言葉は謝罪だった。本当はもっとたくさん言いたいことがあったけど、でも、私の口から出たのはただ一言、「ごめんなさい、だけだった。」

「どうして、謝るの？」

「だって……………」

だって、私は君を傷つけた。たくさん、たくさん、傷つけたから。

「酷いこと、一杯言った。それに、一杯避けた。きつと、一杯傷つけた。」

「でも、それと同じくらい俺も西崎さんのこと傷つけていたと思う。だから、俺もごめん。」

優しい笑みを浮かべながら、沢田くんは私の涙を拭ってくれた。頬に触れた沢田くんの手が温かくて余計に涙が溢れた。やっぱり私、沢田くんが好き。好き。好き。どうしようもないくらい、溢れてしまいいそうなくらい、好きで、好きで堪らない。

「骸の所に行って欲しくなかったのは、骸に西崎さんを取られるんじゃないかって心配だったからなんだ。」

「……………え？」

それって、どういう意味…？

私が涙を流したままの瞳で見上げると沢田くんは困ったように微笑んでいた。

「今は、ここまでしか言えないんだ。でも、西崎さんは誰にも渡さないから。」

それは限りなく告白に近い言葉。だけど、沢田くんはそれ以上の言葉を紡ぐことはなかった。沢田くんが切なげに目を細めて笑うから、私は頬に触れる彼の手に自分の手を重ねた。

「十分、だよ。その言葉だけで、十分。」

沢田くんは今言えるぎりぎりの言葉で私に伝えてくれている。それだけで十分だから。

「ありがとう。」

沢田くんが言葉で紡ぐことが出来ないということは、私も私の気持ちを言葉にしてはいけない。だから、私は返事のもりで、彼の頬に口付けをした。顔を放すと沢田くんは顔を真っ赤にしていた。その顔が沢田くんらしさを沸騰とさせるものだから、私は頬を緩めていた。だから私はもう一度同じ言葉を紡いだ。

「ありがとう。」

2 - 1 2 覚悟（前書き）

随分更新が遅くなってしまいました。すみません。
今回は3話連続で更新させていただきます。

2 - 12 覚悟

「おい、千景。ツナと何があった。」

「……………」

相変わらず鋭い。

目の前に座るリボンから私はあからさまに視線を外し、沈黙を貫いた。だって、リボンの目を見たら心の中全部見られそうなんだもん。いや、この時点で沢田くんとの間に何かあったってバレバレなんですけどね。それよりも私が気になるのは…。

「あのさ、何で応接室？」

そう。私とリボンがいるのは応接室。元雲雀さんの巣。

「ここは人が寄ってこないからだよ。」

「!?!?!」

突然、背後から声が聞こえて私は思い切り肩を揺らしてびびる。まさかと思いつながり振りかえると雲雀さんがドアに背を預けて立っていた。

「ひ、ひ、ひ、ひ、雲雀さん？」

「そうだけど。他に誰に見えるの？」

いや、うん。その極悪顔は雲雀さんで間違いないですね。いや、でも何で卒業したはずの雲雀さんがここに？

「雲雀さん、留年したんですか？」

「千景。いい度胸してるね。」

「じよ、冗談です！」

トンファーを構える雲雀さんに私は両手を上げて降参の意を示した。

「ちっ。」

うわ。今、この人舌打ちしたよ。何、私のことそんなに咬み殺したかったのか？全然嬉しくないんですけど。

「よく考えてみる、千景。並盛大好きの雲雀だぞ。いて当たり前だろう。」

「ああ、確かに。」

「それで納得する君は結構ずれてると思うよ。」

どうでもよさそうにため息をついた雲雀さんは何故か私の隣に腰を下ろした。思わず少し雲雀さんから放れた。それに気付いた雲雀さんがむっとしてこちらを見る。

「何で放れるの？」

「え……。あ！そう言えばリボン、何の話をしてたんだっけ？」

どう返答しても咬み殺されそうな気がして、私は無理矢理リボーンに話題を振った。

「ツナと何があったのか。」

失敗した。それもすつごく危うい話だった。何でリボーンに話振っちゃったんだろ。いや、だって他に話題振る人いないし。何、この雁字搦め。新手のいじめか！？私はため息をつき、覚悟を決めた。姿勢を正し、リボーンを真っ直ぐ見る。

「私、沢田くんが好き。でも別に沢田くんとどうにかなったわけではない。以上！」

「千景がツナを好きなんてことは分かった。問題はそこじゃねえ。」

厳しいリボーンの口調に私の掌に嫌な汗が滲む。

「ツナがお前に想いを伝えたか、だ。」

「言っていない。」

そこは即答できた。だって、本当にはつきりした気持ちは聞いていない。あくまで告白に限りなく近い言葉だけだ。キスをしたのは私から。でもあれは頬だし、デイーノなんて挨拶だって言うてよくしてきた。

「それでも、お前らの間に進展はあったんだろ。」

「仲直り、しただけ。」

汗でべたつく掌を私はぎゅう、と握り込んだ。そうしなければリボーンからの威圧感に耐えられそうになかったから。暫くの沈黙の後、リボーンがため息をつくのが聞こえた。

「千景。前言撤回だ。お前、もうツナに近づくな。」

「な!？」

あまりにも理不尽な言葉に私は顔を上げ、リボーンの瞳を真っ直ぐに睨みつける。

「何で、交友関係までリボーンに口出しされなきゃならないの？」

「君が無知な草食動物だからだよ。」

いつのまにか距離を詰めていた雲雀さんが、私の顎を掬い、私の顔を雲雀さんに向けさせた。雲雀さんの言っている意味がわからなくて、私は探るように雲雀さんの目を見据えた。でも雲雀さんの瞳は何処までも穏やかで、何の感情も読みとれない。

「君、沢田綱吉が何者か知ってる？」

「……………」

雲雀さんが何を指しているのかわかっている。たぶん、沢田くんのお秘密のことを言っているのだ。だから知ってるか、と問われれば私は知らない。沢田くんが何者で、何を抱えているのか、何も知らない。でも、ここで屈したくなかった。

「優しくて、寂しがりやで、でも、本当はすごく強い人です。」

「僕が言ってるのはそういうことじゃないよ。」

「わかってます。でも、私にはそれが沢田くんの全てだし、それだけ分かっていれば十分です。」

そつだ。今まで、彼の秘密にばかり気を取られていたけど、沢田くんがどんな人間か、それだけ分かっていれば後はどうでもいい。例え沢田くんが実は犯罪者だった、とか言われたって私の中の沢田くんは沢田くんではかない。だったらもう、彼が何者だって構わない。

真つ直ぐに雲雀さんを見据えて言う私に彼は少し驚いた様子だった。そして雲雀さんは何処か悲しげに、いや、残念そうに微笑んだ。そつと私の頬を撫で、彼は言った。

「それだけじゃ、沢田綱吉の傍にはいられないよ。」

その言葉は静かに、でも重く私の心に衝撃を与えた。

どういふ、こと？

「千景、あいつは卒業と同時に日本を発つ。」

私は目を見張った。

この赤ん坊は、今、何て言った…？

「あいつはお前を連れて行かないだろう。」

渡り廊下の途中。空を見上げ、ぼーっとしていると遠くから足音が聞こえてきた。

「西崎さん！よかった、やっと見つけたよ。」

「沢田くん……………」

「応接室に呼ばれてたから何かあったのか心配してたんだ。」

「ちょっと、リボンと話してた。」

リボンの名前が出ると沢田くんの表情が強張った。

「その後雲雀さんが来て、一緒にお茶飲んだ。」

にっこり笑って言えば、想像したのか沢田くんは青ざめていた。うん。普通に考えたらかなり怖い状況だね。

「大丈夫だった？」

「……………うん。」

心配そうに尋ねてくる沢田くんには私は笑って頷いた。彼はほっと息をついて微笑んだ。

「帰ろう。」

差し出された手に、私はそつと自分の手を重ねた。そうしたら沢田くんが強く握り返してくれた。

“ あいつはお前を連れて行かない。”

あの言葉を思い出し、私は思わず握る手に力を入れた。

“ 別れの覚悟を済ませておけ。”

「西崎さん？」

さよならをする覚悟が、私に出来るだろうか……。

「沢田くんの卒業と同時にみんなでイタリアへ行くって本当ですか？」

私の唐突な質問に骸さんは目を見開く。その表情がリボーンの言ったことが事実であるとありありと証明していた。

「……………アルコバレーノから聞いたのですか？」

黙って頷けば、骸さんはため息をつき、私の頭を撫でた。

「骸さん、私はどうすればいいですか？」

私は間違いなく、一步沢田くんたちの世界へ近づいた。沢田くんと想いが通じ合って、浮かれていたけど、私と沢田くんの前には問題が山積みだ。彼が誰であろうと構わない。でも、そのことが問題で私が彼に置いて行かれてしまうなら、知りたい。それとも、知ったところで沢田くんは私を連れて行ってはくれないのだろうか。

「どうしたって、沢田くんは私を連れて行ってはくれませんか？」

「連れて行かないと思いますよ。」

即答され、私は縋るように見上げていた骸さんの顔から視線を外し、俯いた。ああ、やっぱり、と思ったけど、それでも悲しくて。置いて行かれるなら、何故彼は私にあんなことを言ったのだろうか。それとも、あれは私の自惚れだったのだろうか。

「沢田綱吉は君を守れると自信を持って言えるようになるまで君を連れて行かないでしょう。……………君が大切なんですよ。」

顎を掬われ、強制的に顔を上げさせられた私の瞳に優しげに、寂しげに微笑む骸さんが映った。

「千景、少々厳しいことを言ってもいいですか？」

「……………はい。」

「君は無知だ。無知な君は沢田綱吉の重荷にしなければならない……………君が彼に今できるのは、突き放すことだけですよ。」

そう言つて骸さんは私を残し、行つてしまった。彼がいなくなり、一人にきりになると、私の瞳から自然と涙が零れ落ちた。私は座っていたソファから滑り落ち、地べたにぺたり、と座り込んだ。

“君が無知な草食動物だからだよ。”

雲雀さんの言つた言葉の意味が今、わかった。それだけでは傍にいられないといった意味も。

確かに、無理だ。彼の人間性を知っているだけでは、私は沢田くんの傍にはいられない。支えにはならない。それどころか、ただのお荷物だ。日本で彼の迎えを待つことさえ、彼の負担になるだろう。だって、ディーノがそうだった。私が何も知らずに彼を求めたから、待ち続けたから、ディーノはとても苦しんだ。

私の存在は、沢田くんを傷つけることしかできない。だからリポーンは私にストップをかけようとしたんだ。意地悪でなく、私と沢田

くんのために……！！

あまりにも無知な自分が悔しくて、悲しくて、涙が止まらない。どうして、うまくいかないのだろう。どうして、好きになってしまったんだろう。どうして、どうして、どうして……。

同じ言葉が何度も頭を廻り、私は涙を止められない。

「千景。」

名前を呼ばれ、私は緩々と顔を上げた。彼のそんなに優しい声を聞いたのは久しぶりな気がする。

「……り、ポー……ン。」

嗚咽を飲みこみながら目の前の赤ん坊を見れば、その大きな瞳に優しい色を宿しながら彼は私の頭を撫でた。

「だから散々忠告したんだ。」

言葉は咎めるものなのに、その声色はどこか優しい。たぶん、私が理解し、自分のしなければならぬことを理解したからだろう。リポーンだって私にこんな決断をさせないために私に厳しいことを言ってくれていたのだ。でも……。

「それでも、私は……、沢田くんを、好きになつたと、思う……。」

「そうか。卒業までまだ時間がある。思い出を心に刻め。」

その後、リポーンは私が泣き止むまでずっと傍で頭を撫で続けてく

れた。

無知であることは幸せだったのか、それとも罪だったのだろうか……。

自分がしなくてはいけないことを自覚した私だけど、決して沢田くんから放れようとはしなかった。リボンもそこは了承してくれている。だから何も言わない。私が秘めている決意など知らない沢田くんはいつもと変わらず優しい。

「わ、雪が降って来たよ！」

帰り支度をしている頃、京子が窓の外を見て、声を上げた。自分の席を離れ、窓を見てみると確かに真っ白な粒が空から降って来ていた。季節が冬を迎えているのだと、改めて実感する。窓を開け、手を伸ばせば、純白の粒が私の手に触れる。

「……………冷たい。」

「ちかちゃん？」

「雪、久しぶりに見たね。」

拳を握り、それを教室の中へと引っ込めると、私は隣で不思議そうに見上げてくる京子に微笑んで見せた。そうだね、と言って京子は再び外の景色に目を移す。そうして2人で雪空を見上げていたら、ガラツ、と扉の開く音がした。

「西崎さん、京子ちゃん。お待たせ。」

ふにやり、と微笑む沢田くんの後ろから武と獄寺くんも入って来た。今日は武の部活がないので久しぶりにみんなで帰ることになってい

た。

時が進むに連れて、私が沢田くんたちの輪の中に入るのは当たり前になりつつあった。以前は別々だった帰りも今は一緒に帰ることの方が多いし、沢田くんの家にだって、もう数え切れないほど行った。

それでも私は彼等の輪の中に本当の意味では入れないのだろう。

「もうすぐ冬休みだな。」

「武はどうせ毎日部活でしょ？」

「ははっ。まあな。」

「野球バカめ。」

「獄寺くん、それ、山本にとっては褒め言葉なんじゃないかな。」

「もうあだ名みたいになってるよね。」

他愛のない話をしながらみんなで歩く。話題は冬休みからその前にある期末試験、それ以外にも昨日のテレビの話や今日学校であった出来事など。話題は尽きない。そしてそのまま別れ道へと差し掛かる。

獄寺くんと京子ちゃんが左、私と武は右、沢田くんは真っ直ぐ。でも今日、私は沢田くんと同じ道に行く。少しでも長く、沢田くんと一緒にいたいから。

「じゃあね、みんな。」

「バイバイ、ツナくん、ちかちゃん。」

「失礼します、10代目。」

「じゃあな。」

手を振り合い、私たちは別れる。私は胸の前で拳を握り、みんなの後姿を見送った。きつともうすぐ、永遠に見れなくなる。

「西崎さん？」

「行こうか、沢田くん。」

微笑み歩き出せば、沢田くんは頷き私に歩調を合わせて歩いてくれる。

「寒くなったね。」

「すっかり冬って感じ。」

冬の寒さですっかり冷えきった手をこすり合わせ、息を吹きかける。ほんの一瞬温まるがすぐに冷えてしまう。そうしていたらすつと手が差し出された。顔を上げれば照れ臭いのか、寒さのせいなのか、顔を赤くした沢田くんがいた。その手の意味がわからず首を捻ると苦笑した沢田くんが私の手を握った。

「こついたら少しは温かいでしょ？」

「……………ありがとう。」

その笑顔はずるいと思う。そんな優しい笑顔、ずるい。恥ずかしくて、私は視線を反らす。沢田くんは一瞬で私の心を掴んでしまう。翻弄されるばかりで少々悔しい。

「冬休みが開けたら、最後の学期か。」

ふと呟かれた言葉に私は思わず足を止めてしまう。突然歩みを止めた私を沢田くんが不思議そうに見下ろす。

「どうしたの？」

穏やかに笑って問いかけてくる沢田くんには私は一拍遅れてなんでもない、と返事をした。そして私たちは再び歩き出した。

何で、そんなに穏やかな顔で先の話をするの？

私は沢田くん気付かれないように唇を噛んだ。そうしなければ泣いてしまいそうだったから。いつか、来てしまうこの手を放さなければいけない日が怖くてしょうがない。

「冬休み、2人で何処かに出かけようか。」

照れてはにかむ沢田くんの笑顔を見ると余計にこの手を放したくないと思う。わかっている。別れが来ることは変えられない。

ならばせめて、もっと時間がゆっくり流れてくれればいい。

冬休みなど来なければいい。

この銀世界の中、私と沢田くんの2人きり、時を忘れて過ごしていければいいのに……。

無理だと分かっているでもそう願わずにはいられない私は、愚かなのだろうか……。

2 - 15 別れ

少しずつ近づく別れの時を、私は受け止めあぐねていた。好きなのに……。大好きなのに、どうして離れなければならないんだろう。どうして、一緒にはいられないのだろう……。

冬休みには2人で出かけて、クリスマスを一緒に過ごして、一緒に初詣に行つて……。限られた時を私はなるだけ多く沢田さんと過ごした。毎日に幸せを感じれば感じるほど、日々が過ぎていくことが悲しかった。

そしてとうとう、高校生活最後の学期に入った。1月一杯は学校に通う私たち3年生だが、2月からは自由登校に入る。私は東京の大学に進学が決まっている。そして沢田くんは……。

「沢田くんは、卒業したらどうするの？」

知っていたけど、沢田くんから聞きたくて、私は尋ねた。今にも泣きそうになってしまう自分を奮い立たせ、必死に笑顔を作った。沢田くんは困ったように笑い、歩いていた足を止めた。そして、真剣な顔で私の顔を見返してきた。

「本当はもう、知っているんだよね。」

「……知っているよ。でも、沢田くんの口からちゃんと聞きたい。」

「俺は……イタリアへ行くよ。」

目を反らさず、真っ直ぐにそう告げてくれた。わかっていたことだ。

わかっていたことのはずなのに。別れは、覚悟していたことなのに…。

「西崎さん、俺…。」

「私、待ったりしない。」

沢田くんの言葉を遮り、言った。

「沢田くんを待ったりしない。追いかけてりもしない。もう待つのは嫌だから。」

君の重荷になるのはもっと嫌だから。だから…。

「だから、今日でさよならしよう。」

「……。」

沢田くんは私の言葉に肯定も否定もしなかった。ただその瞳は悲しげに揺れていた。お願いだから、そんな瞳で私を見ないで。泣き出しそうな心を見透かさないで。

突然、握っていた手を強く引かれ、気がついたら沢田くんの腕の中にいた。

「ごめん。」

突然のことに頭がついていかない。どうして彼は謝っているの？どうして置いて行くのに抱きしめるの？

私は、君の重荷にしかなれないのに…！

悔しくて、悲しくて、涙が溢れてきた。腕の中から出ようとものが、彼は放してくれなかった。

「嫌！放して！」

「……………」

「置いて行くくせに！何も、話してくれないくせに！…何で！何で！何で！」

沢田くんの腕の中で暴れ、彼の胸を何度も何度も叩いた。それでも彼は私を放さず、寧ろ強く抱きしめてきた。

「好きになって、ごめんね。」

その言葉に、私の動きがぴたり、と止まった。何て、何て悲しい声で言うのだろう。顔を上げれば、切なく揺れる沢田くんの瞳と目が合った。

「俺が君を好きになったから。諦められずに近づいたから。傷つけた。」

悲しみに歪む沢田くんの表情はまるで泣いているようだった。

……違う。違うよ。私は、君を好きになったこと、後悔なんてしてない。想いが通じ合ったこと、後悔なんてしてない。ただ、悔しかっただけ。置いて行かれることが、君の重荷になってしまふことが…。悔しかっただけなの。

そんな悲しい顔をさせるために、別れを切り出したんじゃない。

「俺のこと、忘れて。……………さようなら。」

放れて行く温もりに、私は縊ることも、言葉をぶつけることも出来なかった。

違うのに。

こんな別れ方をしたかったわけじゃない。

こんな風に傷つけたかったわけじゃない。

どうして…。

どうして、私は追いかけれないの？

どうして、違うのだと、伝えられないの？

どうして……。

そう問うくせに、私の中で答えは出ている。怖いのだ。伝えたくてこ
ろで何も変わらない現実を受け入れるのが。これ以上、傷つくのが。

私はただその場に立ちつくし、泣くことしか出来なかった。

2 - 16 幼なじみ

沢田くんは別れの言葉を告げてから、私と沢田くんは言葉を交わさなくなった。突然の変化にみんな心配してくれた。でも私は笑って誤魔化し、もういいのだと言った。

自由登校が始まり、私は春から一人暮らしをするためにその準備に追われていた。そうしているとあつという間に卒業の日が間近に迫って来た。それは、本当に沢田くんとさようならをする日。

「千景！」

窓の外からの呼びかけに私はのろのろと窓を開け、下を見た。

「武？」

「ちょっと下りてこい。」

真剣な顔でこちらを見上げる武に私は目を瞬かせる。彼ももうすぐイタリアへ行く。そのための荷造りやらなんやらで此処の所全く会っていないかったのだが、そんな忙しい彼が何のようなのだろう。不思議に思いながら外に出るといきなり武に腕を掴まれ、彼はそのまま歩き出した。

「ちょ、何なのよ！武！？」

「俺達、今日、日本を発つんだ。」

「……………え？」

止まりそうになった足を武が半ば引きずるようにして私を引っ張って歩かせた。

「だって、卒業式は？」

「出ない。誰にも言わないはずだった。でも、今のお前らは見てられねえんだ。千景のそんな顔もツナのある顔も見えていたくない。」

だからもう一度会え。武はそう言う。でも、今更沢田くんに会ってどうしろというのだろう。私はちゃんと自分で答えを出して、沢田くんに別れを告げたのだ。さよならを、告げたのだ。今更彼に会って、何を言えというの？

「私行かない。」

「千景！」

「だって、今更私が行って何になるの！？私が何を言うの！？私の気持ちは変わらないし、沢田くんが私を連れて行かないっていうのも変わらない！会って何になるの！？？」

「じゃあ後悔しないのか！」

両肩を掴まれ、武はすごい剣幕で怒鳴ってきた。初めて、武に怒られた。

「俺は…、千景が好きだった。」

「！…！」

「伝えずにいたことをずっと後悔してた。お前がディーノさんの事で傷ついたのに、何もしてやれなくて、後悔した。俺はすげえ後悔したんだ。だから、お前は後悔する道を選ぶな。ツナとの思い出を悲しいものにするな。だってお前、ツナのこと大好きだろ？」

瞳に涙をためながら、私はこくり、と頷いた。それを見て、武はいつもの笑顔を私に向けてくれた。じゃあ、急がなきゃな、そう言っ
て私の手を握り、再び走り出した。

目の前の武の背中が大きい。いつのまに、彼はこんなにも大きくな
ったのだろう。いつから、私を護ってくれていたのだろう。何も知
らず、私は武に甘え続けていた。

「ありがとう、武。ありがとう…。」

大好きだよ。そう続けようとしたけど、それは言うてはいけない気
がした。だって、私の好きと、武の好きは違うから。

「ありがとう…。」

「おう。…千景、お前が後悔しない道を選べ。」

私の手を握る武の手に力が加わった気がした。だから私は意志表示
に強く握り返した。

ありがとう、優しい人。私の大切な幼なじみ。

2 - 17 さよなら

「ツナ！」

空港に現れた私を見て、みんなが驚いていた。でも沢田くんが一番驚いていた。瞳を大きく見開いて、何度も口を開けたり閉めたりしていた。

「小僧。まだ時間あるよな。」

武がリボーンに視線を向けると彼は深々とため息をついた。しかしその表情はどこか穏やかだ。まるで予想していたかのように。

「ツナ。搭乗時間までまだ時間がある。話したけりや行つて来い。」

呆然としている沢田くんに蹴りを入れ、私の目の前まで押しやる。私よりも頭一つ分大きい沢田くんを見上げる。彼はこの1年ほどで随分身長が伸びた。それに昔よりずっと男らしくなった。こりや、女が放つてはおかないだろう。そう思い、苦笑する。この人を繋ぎとめておく自信が私にはない。

「……………」

みんなから放れて2人で向き合うものの、互いに無言のままだった。何を話せばいいのかわからず、私は沢田くんの顔を見ることさえできなかつた。

「……………見送りに来てくれたの？」

先に口を開いたのは沢田くんだった。あんまり優しい声で、涙が溢れてきた。泣いていてもしょうがないのに。泣いたって私の想いは伝わらないのに。そんな私の頬に沢田くんのちよっと骨ばったでも綺麗で暖かな手が触れた。そつと指の腹で私の涙を拭ってくれた。

「また、泣かせた。…ごめんね。」

「違うの!」

彼にこれ以上悲しい顔をしてほしくなくて、謝ってほしくなくて、私は顔を上げた。だってこんな顔をさせたかったわけじゃないから。私は、私は……!!

「沢田くんが好き。」

頬に触れている彼の手に自分の手を重ね、真つ直ぐに沢田くんの瞳を見て言った。彼の瞳が大きく見開かれた。

「傷つくのは…、悲しいのは…! 沢田くんが好きだからだよ。だからお願い…。謝ったりしないで。」

自分でもわかるくらい、声が震えている。今にも俯いてしまいそうでも、ちゃんと沢田くんの顔を見たい。沢田くんから目を反らしたくない。

「私は…、沢田くんを好きになったこと、後悔なんてしてない。また人を好きになれて、よかった。君を好きになって、よかったよ。」

だからお願い。そんな悲しそうな顔をしないで。お願い。私との出会いを後悔したりしないで。

言葉で伝えきれない気がして、私は彼に近づき、背伸びをすると、沢田くんの唇に自分の唇を重ねた。ほんの何秒間の口付けが、私には永遠のようにさえ思えた。

「愛してる。」

身を放し、そう告げれば、目を見開き驚いていた沢田くんの表情が泣き出しそうに歪んだ。それを隠すように私の肩に顔を埋める。

「俺も君が好きだよ。誰よりも、誰よりも愛してる。でも、だからこそ、連れていけない。」

声が震えている。私を抱きしめる腕も微かに震えている。もしかしたら、彼は泣いているのかもしれない。1ミリだって放れたくなくて、私は彼の背に手を回した。そうしたら、より強く、沢田くんは私を抱きしめた。

「好きなのに…！好きだから…！連れて行く訳に行かないんだ。」

彼の悲痛な叫びが胸に響く。どんどん強くなる抱きしめる腕が、放したくないと言われているようで。嬉しいはずなのに、今はただ切なくて、また頬を涙が伝った。

そっと沢田くんが身を放し、私の頬を包んだ。どちらからともなく近づき、私はそっと目を閉じた。

唇に柔らかく、暖かな温もりを感じる。吐息が混じり合う。

このまま、ずっと一緒にいられたらいいのに。そんな想いが頭を過る。

唇が放れ、温もりも放れて行く。私は縋るように沢田くんの手に頬

を寄せた。暖かい、大好きな君の手。この手がいつか誰かの物になつてしまふのなら、それはとても悲しい。でも、沢田くんはこの手で守るものがたくさんあるから。独り占めには出来ない。でも、願うことだけは許されるだろうか。

「誰のものにもならないで……。」

「……………」

呟くように紡がれた言葉に沢田くんは肯定も否定もせず、優しく微笑んだ。その表情に悲しみはない。

「ツナ、時間だ。」

リボーンの声が、私たちに別れの時を告げた。

「分かった。」

沢田くんの手が放れて行く。その手を私が掴むことはもうなかった。沢田くんは私に背を向け、歩き出し、数歩行ったところで止まった。振り返り、優しい笑みを浮かべたまま口が開いた。声になることのない言葉は確かに私に届いた。

（愛してる。だから、さようなら……。）

彼は確かにそう言った。涙が後から後から溢れて来る。

本当は行かないで欲しい。
置いて行かないで欲しい。
連れて行って欲しかった。

でも、それは出来ないから。だから別れるしか道はなかったのだ。

「愛してゐる。」

さようなら。愛してるから、誰よりも大切だから、だから……、
さようなら……。

2・17 さよなら（後書き）

次回から三章に突入です。

3 - 1 君のいない日々

卒業式を迎えて、私は大学生になった。

東京での一人暮らしは最初こそ不安でホームシックにもなったけど、馴れてくれば、自分の城が出来たようで自由気ままに生活を送れるのが楽しくなった。

当たり前のように春が過ぎ、夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬が過ぎ……、そうして季節は廻った。

変わったことはたくさんある。

短かった私の髪は今では胸ぐらいまで伸びた。少しは化粧もするようになった。大学の友達はたくさんできたし、何度か告白もされた。周りも私も色々変わっていく。変わらない物なんてありはしないのに……。

そんなある日、花から連絡が入った。

懐かしい高校時代の友人からの誘いにその週の末、私は並盛の町に一度戻った。ほぼ2年ぶりに戻った並盛は何も変わっていないくて、心まで高校時代に戻りそうだった。

「千景。」

懐かしい声に振り返れば花が立っていた。懐かしい友人に私の頬は自然に緩み、彼女に向かって駆け出した。

「花！久しぶりだね。」

「本当よ。あんた、全然帰ってこないんだもの。」

花は地元から通える大学に通っている。だから本当は私が並盛に戻ってくれば会えるのだ。暗にもっと頻繁に帰って来いという花に私

は曖昧に微笑んだ。

私たちは高校時代からお気に入りの店、ナミモリー又に入り、紅茶とケーキを注文して最近の出来事を話して盛り上がった。大学の講義は眠いとか、サークルはどうだ、とか…。

「千景は好きな人できたの？」

「花はできた？」

花の質問に私は質問で返した。そんな私に花はため息をつくと自分の事を話してくれた。

「彼氏できた。」

「嘘！？やっぱ年上？」

「嘘ってなによ…。年上だけど、全然年上っぽくないけどね。」

年上だけど年上っぽくない人…。花がそんな人と付き合うなんて…。たぶん呆けた顔で花を見ていたのだろう、何の前触れもなくでこぴンされた。

「それで、あんたは？…まあ、どうせいないんだろうけど。」

私は苦笑するしかない。好きな人はいる。高校生のときからずっと好きな人。でも、彼を想っていたってしょうがないとわかっているから。言葉には出したくないんだ。

「まだ、沢田が好きなの？」

「……………」

花の質問に私は肯定も否定もしなかった。私は目の前の花から視線

を外し、窓の外を見た。
何も変わらないこの町。だけど、この町にももう、沢田くんはいない。
帰ってこない。
会いたくても、会えない。

「早く誰かを好きになれたら、楽になれるのかな…。」

「千景…。」

「ねっ！花の彼氏ってどんな人？」

花とはその後、彼女の彼氏についてずっと話していた。私に対する質問の余地を与えない勢いで私は花に質問した。

何でも花の彼氏さんは海外で仕事をしているらしい。そのためあまり会えないのだという。

すぐに頭に血が上ってしまうが意外と女性に気が遣える紳士な部分もあるらしい。

時折憎まれ口を加えながらも彼氏さんの話をする花の表情は幸せそうだった。

「じゃあね、花。彼氏と幸せに。」

帰り際、花にそう言って手を振った。次会えるのはいつかわからないから。

「千景！」

何処か切羽詰まった花の声に振り返ると、花はとても悲しそうな顔をしていた。彼女の言おうとしていることがわかって、私は笑った。

「大丈夫。」

そう言つて今度こそ、花と別れた。私は真つ直ぐ家には帰らず、懐かしさ漂う並盛の町を歩いていた。並盛中、高校、通学路に公園、穂月さんのお店にも顔を出した。

そしてそのどの場所にも沢田くんとの思い出があつて、愛しくて、切なかつた。

沢田くんのいない毎日はとても寂しくて、まるで世界から色が消えてしまったかのように味気ないものになつてしまつた。

友達もたくさん出来て、大学生活も充実していて楽しいはずなのに物足りなさを感じる。

色々な変化が起こる毎日の中で私の心は変わらずに沢田くんを求めている。狂おしいほどに沢田くんを想っている。

「大丈夫」。

それは私の呪文の言葉。沢田くんがいない毎日に負けないで笑っているための。

それでもね、時々どうしようもなく寂しくなるの。

青空を見上げた時、雪の降り積もつた銀世界を見た時、甘めのカプチーノを飲んだ時……。

どうしようもなく、君に会いたくなる。

君の声で名前を呼んで欲しくなつて、骨ばつた、でも綺麗な君の手の温もりを感じたくなる。

抱きしめて欲しくなるの。

君のいない日々はなんて……、息苦しいのだろう……。

3 - 2 イタリア (前書き)

今回、短いです。

3 - 2 イタリア

再び大学生活に戻った私の元に一通の手紙が届いた。

それは以前、バイトでお世話になっていた叔母の穂月さんからのものだった。

先日、並盛に帰った際も一応顔は出したのだがあそこにはたくさん
の思い出があつて、すぐに出てきてしまったのだった。

「それにしても、穂月さんが私に手紙なんて珍しい…。」

独り言を呟きながら封を切った。

中には手紙と航空券が入っていた。それを不思議に思いながら手紙を開き、その内容に私は目を見張った。

千景へ

久しぶり。まあ、この間会ったばかりなのだけど。

手紙を書いたのは以前に会った時に話すのを忘れていたからなの。

実は、コーヒーの勉強に一度イタリア旅行に行こうと思っ
ているの。だから千景も一緒にどうかと思っ
て。

あなた、大学でイタリア語を専攻してるんでしょ？

役に立ちそうだし、旅費はこっちでだから。

夏休みに入ったらすぐにいくから準備しておいてね。

月より

穂

航空券を送ってきている時点で私の意見を聞く気はないな。てい
うか、手紙の内容も誘いつつというより決定事項だし…。

手紙と航空券を覗みながら私はため息をついた。

イタリアか…。

そこに行った人を想い、私は再度ため息をつく。

沢田くんはもう、私のことなど忘れてしまっただろうか…。

イタリア旅行。

偶然にしろ、必然にしろ、沢田くんがいる場所に行けるといっものは何かあるのかもしれない。カレンダーを見れば、夏休みまであと数週間。少しずつした方がいいかな。

………ていうか、穂月さんはどのくらいの間行くつもりなのだろうか？

「ボンジュール、イタリアー!!」

空港に辿り着くや否や声を上げる穂月さんを他の客が凝視する。そして私は知らないふり。

「行くわよ、千景！ホテルに荷物を置いて、さっそくコーヒーを飲みに行きましょう！」

腕を引つ張られ、私の知らないふりは失敗に終わった。無駄にテンションの高い穂月さんに苦笑する。

元々穂月さんはイタリアにコーヒーを飲みに来たかったのだそうで、今までこつこつと旅費を溜めていたらしい。そんな訳で旅費を払ってくれるという穂月さんの申し出を断り、私は自分のバイト代と今までのお小遣いを合わせて今回の旅行に同行した。

ホテルまでの道を歩きながら、私は初めて見るイタリアの街並みを見まわしていた。どの建物も日本の質素な物と違ってお洒落だ。カフェにしたってどこも綺麗だったり、可愛かったり…。まるで絵本のおとぎの国に迷い込んだような気分だ。

「穂月さん、あとで色々と回ってみてもいい？」

さっそくカフェに入り、コーヒーを飲みながら私はガイドブックを開きながら穂月さんに尋ねた。

「いいけど、私は予定があるから一緒には回れないわよ。」

「うん。穂月さんの用事が済む間だけだから。」

好きにきなさい、と穂月さんは穏やかに微笑み言った。

もうすぐ40歳になると言っていたけど、この人は昔から変わらず綺麗だ。イタリアの男性だろうと誰だろうと魅了してしまいたいそうだ。

穂月さんの用事が済むまでの3時間程を私は一人で観光することになった。ガイドブック片手に行ってみたかった場所やイタリアでも有名なカフェなどに行ってみた。

有名と言われるだけあって、そのお店のコーヒーはなかなか美味しかった。でも、ちょっと高級感が溢れていて、私には向かないかも。

そんなことを思い、お店の外に出ると向かい側に真っ黒なリムジンが止まっていた。リムジンなんて初めて見るものだから思わず立ち止まって見入ってしまった。

リムジンの扉が開き、現れたのは………薄色の髪だった。

私が、彼を間違えるはずがない。

息が、止まるかと思った。だが、続いて出てきた人を見て、私は背を向け、走り出していた。

金に近い茶の髪。髪は長くなっていたが、あれは京子だ。

知らない女の人が隣にいる以上に私はショックを受けていた。彼女は確かに沢田くんと一緒にイタリアへ渡った。だから一緒にいるのは不思議じゃない。

でも、2人は腕を組んでいた。どう見たって恋人同士にしか見えな

い。どうして、よりにもよって京子なのだろう。これならまだ、知らない女の人を愛してくれた方がよかった。だって、京子は全部知っているのに。

私が、沢田くんを好きなことも、沢田くんが私を好きでいてくれた

ことも、放れるしかなかったことも……。
ただど彼女は今、沢田くんが一番近い所にいる。
それが羨ましくて、悔しい。なんて、浅ましいんだろう。私は彼の
幸せを願っていたんじゃないの？だとしたらこれは、私の望んだ結
果じゃない。

…………… 本当に？

私は、本当にこれを望んでた？

違う………！

だって、心の何処かで期待していた。

私が今でも彼を好きでいるように、彼が私を愛し続けてくれている
ことを。また出会い、笑顔向けられるその時を、私は期待してい
た。

今でも彼に愛されていることを。

苦しくなる胸を抑えて、泣きだしそうなのを我慢して、小さな声で
呟いた。

「何であたしだけ、こんなに苦しいの…？」

今でもこんなに好きなのに。好きすぎて、君のいない日々息をす
るのも苦しいのに。どうしたら私はこの苦しみから抜け出せるの？

「千景？」

名前を呼ばれ、びくり、と肩を揺らす。恐る恐る振り返ると、そこ
に立っていたのは武だった。

懐かしい幼なじみ。彼は驚きに目を瞬かせていた。そして私の顔を
見て眉を寄せる。

「どうした？何かあったのか？」

「何も、ない。ちょっと道に迷っただけ。でも、大丈夫だから。」

顔を背け、すぐに歩き出そうとした私の腕を武が掴んだ。

「何？」

「ツナに会いに来たのか？」

脳裏に懐かしの薄色の髪が浮かぶ。固く目を閉じ、それを振り払う。

「穂月さんと旅行に来ただけ。」

「そうか。」

暫くの沈黙の後、私は小さな声で言った。

「言わないで。」

「え？」

「私に会ったこと、絶対沢田くんと言わないで。」

「…何で？」

「もつ関係ないからよ!」

涙で滲んで武の顔がよく見えない。でも、なんとなく困惑しているのがわかる。そんな顔をむけられれば余計に自分が惨めに思えた。勝手に期待して、勝手に落ち込んで。そんな自分が惨めで、愚かしくて……。

これ以上、そんな気持ちになりたくなかった。

「ちか…。」

「放して!」

思い切り腕を引き、武の手から逃れようとするが彼は放してはくれなかった。直も暴れ続ける私を武は抱きしめた。

「千景、落ち着け。」

優しく背中を撫でられ、私は少しずつ落ち着きを取り戻し始めた。混乱は大分納まったが涙は止まらなかった。

「ツナに会いたくねえなら無理に会わせようとはしねえ。でもさ、せめて俺に送らせてくれ。今の状態で一人にさせるのは心配だから。」

武の腕の中でこくり、と頷けば、よし、と頭上から明るい声が聞こえた。

靄のかかる頭の中に、沢田くん最後の優しい笑みと言葉を思い出していた。

(愛してる。だから、さようなら…。)

あの日、沢田くんはきっぱりと私と別れたのだ。未練をあの人に残し、私の存在も消したんだ。

さよなら出来ていなかったのは、私だけ…。

あの後、どうやってホテルまで戻って来たのか、薄らとしか覚えていない。とりあえず武に手を引かれながら帰って来た。そのあとすぐにベッドに入って泣きつかれたのか眠ってしまった。朝になって目が覚めた時にはもう、武の姿はなかった。

昨日の出来事全てが夢であればいいと思ったが、テーブルの上にあった置き手紙が昨日のことが現実だと訴えて来る。

『時間を作ってまた来る。ゆっくり休めよ。』

武より』

手紙を呼んで、私は深々とため息をついた。

律儀と言つか、なんとというか。別に会いに来てくれなくていいのに。武は沢田くんに繋がっている。それはどうしたって私を苦しくさせる。

「千景、起きたの？」

「…おはよう、穂月さん。」

精一杯の笑顔を浮かべて穂月さんを振り返れば、彼女は心配そうに顔を歪ませた。

「無理しているでしょ。」

「無理、しているのかな…。」

苦笑する私に穂月さんのため息を吐くとコーヒーを淹れるからと言って私を部屋にあるソファに座らせた。ふかふかのそれに腰を下ろし、目を閉じる。

薄色の髪が蘇る。

……顔くらい、見ておけばよかったかな。

どんなに苦しくても、悲しくても、それでも私は彼を嫌いにはなれない。

「ねえ、穂月さん。」

「何？」

丁度コーヒを淹れて戻って来た穂月さんに私は問いかける。

「忘れられない人っている？」

「…いないわ。」

残念ながらね、と少し茶目っ気を含ませて言う穂月さんに私は力なく微笑んだ。

「千景にはいるの？忘れられない人。」

「…高校3年生の時に別れた人が今でも好き。でもその人は、今はもう別の人と幸せになっているみたいなの。それが、すごくつらい。」

別れることに納得したはずなのに。彼の幸せを願い、忘れられても構わないと思っただのは嘘ではないのに。

いざ目の前に突き付けられた現実には悲しかった。

「毎日を泣いて過ごすくらいなら、忘れてしまいたいの。…どうしたら忘れられるかな。」

「どうして？」

「えっ？」

「どうして忘れたいの？彼がもう、千景を好きじゃないから？」

心底不思議そうに聞かれて私は戸惑う。違うとも違わないとも言えなかった。確かに、彼が私を好きじゃないのはつらい。でも、忘れてしまいたい本当の原因はそこじゃない。苦しいからだ。

「思い続けるのが苦しいから。悲しくて、惨めな気持ちから逃げたいから…」

惨めにさせるこの現実から逃げてしまいたかった。今でも沢田くんを思い続ける自分は惨めで愚かだ。そんな気持ちになるのは嫌だった。

消し去りたい、忘れたい…!!

「だからって今の自分の気持ちまで否定する必要があるの？」

「え？」

「確かに相手から気持ちを返されないのはつらいし、苦しいわ。でも、だからって惨めに想う必要はないわ。だって、あなたはそれだけその恋に本気だったことでしょ？そんな感情を抱いてしまうくらい、彼が好きだったことでしょ？それは誇るべき気持ちだわ。」

この醜い気持ちか？この浅ましい思いか？本当に誇れる気持ちだろうか…。

不安に揺れる私の瞳に気がついたのか、穂月さんは優しく私の頭を撫でた。

「好きでいることを素直に受け入れなさい。そうしたら、きっと少しは楽になる。」

「…好きだから、苦しいのに…」

「許してあげないからよ。醜い感情を抱いてしまう自分を。だから、

本当の意味で許してあげて。彼を好きな、あなた自身の想いを……。」

抱きしめられ、私の瞳から涙が一筋零れた。

私は、許せるだろうか……。

この醜い感情全てを受け入れるのは難しい。そう簡単にはいかない。

たぶん、当分の間は苦しむと思う。でも、出来ることなら……。

私は、私を……。

沢田くんを好きな私を許してあげたい。

3 - 5 会いたくない理由

イタリア旅行3日目。武が本当にやってきた。意外な人物と共に…。

「まさか沢田くん第一主義の獄寺くんがやってくるとは…。」

「ふん、莫迦にすんな！俺は今でも10代目一筋だ！」

「ああ…、そうなんだ…。」

見た目は大人びても中身は莫迦な獄寺君のままなんだね。

「残念なものを見るような眼で俺を見るな！」

「ははっ。相変わらず仲良しだな。」

「私たちが仲良しに見えるなら、武の眼は節穴だね。」

「千景、目が笑ってねえぞ。」

珍しく武が引き笑いを浮かべる。怖いもの知らずの武でも幼なじみの私の作り笑いは怖いらしい。昔仕込んでおいた甲斐があつたな。

「相変わらず黒いな。」

「ちよっと待ってよ。相変わらずって何!？」

聞き捨てならない言葉に獄寺君を睨むが彼は顔を反らし、どこ吹く風といった様子だった。

こいつ、殴ってもいいだろうか…。

「あのね、黒いってというのはリボンとか骸さんとかリボンの事を言うんだよ。」

「リボンさんが2回入ったぞ？」

それぐらいリボンが黒いつてことだ。だってあいつ心の中真っ黒だろ。一点の白も存在しないくらい真っ黒だろ。もういつそ清々しいくらい真っ黒だろ。

「誰が真っ黒だって、千景？」

突然現れた新しい声に私は息を飲む。背中を冷や汗が流れる。

「わあ、久しぶりだね。リボン。」

「久しぶりだな、千景。」

ニヒルな笑みを浮かべたりリボンが昔と変わらぬ姿でそこにいた。こいつは年をとらないのだろうか…。妖怪か何かなのかな？まあ、でかくなったら可愛げなくなって、余計に腹の立つ子どもになりそうだけど。

「思考がダダ漏れだぞ、千景。撃ち殺されたいのか？」

「えっ！？声に出てた？」

「俺は読心術が使えるんだぞ。」

だからそれ、プライバシーの侵害だから！

「ていうか、武！何だってこんなに連れて来るのよ！」

「ダメだったか？ツナには言っていないぜ？」

「…っ。」

反論しようとするが言葉が出ない。確かに沢田くんに言わないで、と言っただけで他の人については何も言わなかった。

「そこが気に入らねえ。」

「……何が？」

「何で10代目に会わねえ。」

「…会って、どうするの？」

私と彼は別れたのだ。沢田くんがイタリアへと旅立ったあの日に。私は彼を待たないと言って、彼は私を置いて行った。それに、沢田くんの隣には今、京子がいるじゃない。

「私は沢田くんと笑って話せる自信がない。だから会いたくない。」

「千景…。」

「そもそも！私と沢田くんを会わせる気があるわけ？」

リポーンに向けて笑みを浮かべながら尋ねた。武、獄寺くんの視線もリポーンに集まる。

最終的には自分で下した決断だけど、私はリポーンの意向に従い、沢田くんと別れた。私と沢田くんを別れさせたリポーンが私を彼に会わせてくれるとは考え難い。

「お前は今でもツナが好きか？」

「質問したのは私なんだけど。」

「答える。」

「……好きでも嫌いでもない。ただ、もう二度と、会いたくない。」

嘘。

今でも彼が好きだ。彼に会いたくてたまらない。声を聞きたくてたまらない。

だけど、沢田くんがもし、他の誰かのものだったら？

その現実に、私はきつと耐えられない。それに、私はまだ、沢田くんを好きな自分を許せていない。だから言えない。言いたくない。

今は沢田くんに会いたくない。

「お前が会いたくないなら、会わせるつもりはねえ。」

……何それ。じゃあ会いたいと言えば会わせてくれたわけ？

別れると言ったくせに。近づくなと言ったくせに。

沸々と沸き上がる怒りを私は必死に抑え込み、リボーンを睨みつける。

「千景、ツナはきつと、会いたいと思う。」

「俺もそう思うぜ。10代目は……………」

「勝手なことばかり言わないで!!」

気付いたら私は怒鳴っていた。武と獄寺君が驚いた顔でこちらを見ている。リボーンだけが私の心情を見透かしたように冷静にこちらを見ていた。

その冷やかな視線が余計に私を苛立たせる。

やめて！私の心を見透かさないで！

「私を置いて行ったのは彼でしょ！私は今、沢田くんのいない今を過ごしているの！今更、会いたくなんてない！」

会ったら、会ってしまったら、明日を迎えるのが怖くなる。沢田くんのいない毎日を送るのが怖くなる。

「千景……………」

「西崎……………」

ごめん、そう言って武は私の頭を撫でてくれた。獄寺くんは何か言

いたげな瞳をし、だが首を振って頭を乱暴にかき上げた。

「千景。明日、パーティーがある。お前、出席しろ。」

「…お断りします。」

気持ちを落ちつけた私はリボーンを睨みつけた。

「お前に拒否権はねえ。それとも、穂月を一人でこちらに寄こすか？」

「!!!」

つまり、穂月さんを私がパーティーに行くための人質として誘ったわけ。

「人でなし。」

「褒め言葉だな。明日迎えをよこす。屋敷で待ってるぞ。」

そう言ってリボーンは困惑している2人を連れて帰って行った。

3 - 6 パーティー

リポーンが指定した日、時間に迎えの車は来た。

乗り気でない私は穂月さんに引きずられるようにして車に乗り、パーティーの行われる洋館まで連れて行かれた。それは以前、ディーノに別れを告げた洋館に雰囲気似ていた。

だからだろうか、ここに沢田くんがいるような気がした

私たちはメイドの様なひとたちに連れて行かれ、洋館の一室でドレスに着替えさせられた。まるでディーノと別れた日の再現のようで、私の心に不安が降り積もって行く。

リポーンの考えていることが全くわからない。

何故、私をここに連れてきたの？ここで何かあるの？

化粧や髪型を整えられている間、私は不安で揺れる心を必死に沈めていた。

考えるな。何も考えず、何も受け入れず、ただ時間まで耐えればいい。

そして穂月さんと共に、私たちはパーティー会場へと連れて行かれた。

華やかな女の人たち、スーツに身を包んだ高貴な雰囲気と威厳を持った男の人たち。そして豪華な料理。煌びやかな世界に私は気後れする。

この世界は私のいる場所とは違う。

「別世界」。というのがびつたりという言葉なような気がした。

私は入って早々壁の花と化した。ちなみに穂月さんは珍しい料理が一杯だと嬉しそうに料理の観察に向かった。この場に気後れしていない彼女に驚き半分、変な人に声をかけられないか心配半分。中身

は好奇心の塊のような人だけど外見は美人だし。

「心配しなくても穂月に手を出す奴はいねえぞ。」

「…リボン。」

私の不安の原因を作った人物の名を私は気持ち低めの声で呼んだ。パーティーだというのにいつもと同じ真っ黒なスーツとボルサリーノ。しかし全く違和感がない。

「君はこの住人ってわけね。」

ため息交じりに言えば、リボンは何も答えずにただ変わらぬ澄んだ瞳で私を見ていた。まるで心の奥底まで見透かされそうで私はリボンから視線を外して目の前の光景を眺めていた。

今の所沢田くんらしき人には会っていない。会えなくていい。このまま会えないまま、何も知らないまま帰りたい。

「こんばんは、千景。お久しぶりですね。」

懐かしい声に顔を上げるのと同時に目の間に飲み物を差し出された。驚きながら差し出された飲み物を受け取る。

「…骸さんもいらしてたんですか？」

「まあ、仕事ですからね。」

久しぶりにあった骸さんは髪が伸びていたが、パイナップルな感じとか怪しい感じは変わらなかった。

「千景、失礼なこと考えてませんか？」

「滅相もございません。」

黒い笑顔も相変わらずのようで……。私は真つ黒な笑顔を浮かべる骸さんに作り笑いを浮かべて応えた。

「へえ、千景来たんだ。」

「あれ、雲雀さん。こんな群れの中でどうしたんですか？」

「なんか、口調が刺々しい気がするんだけど。咬み殺していいの？」

相変わらずの無表情、危険発言で現れた雲雀さんだけど、やっぱり成長しているらしく仕事だからこうして群れの中にいるのだと説明してくれた。

「千景は綺麗になったね。啼かせてみたい。」

「えっ。嫌ですよ、泣く思いをするのは。」

「……雲雀恭弥。ちょっと殴っていいですか？」

「どうしたんですか、骸さん。ブラックスマイル発動してますよ。」

「ほっとけ、骸。千景は気付いてないぞ。」

「…相変わらず鈍いんだね、千景。」

せつかく綺麗になったのに、とさも残念そうに言われ、眉を寄せるがさっぱりわけがわからない。

雲雀さんは私の隣に立つとここ何年かで随分伸びた私の髪を弄んだ。女顔負けの綺麗な指に私の真つ黒な髪が絡む姿はどこか艶めいて見えて、少しドキツとした。

相変わらず綺麗な顔立ちにしばし見とれていると突然肩を抱くようにして引き寄せられた。

「あまりべたべたと千景に触らないでもらえますか？」

「骸さん？」

「君こそべたべた触らないでくれる？」

両隣で睨みあう2人に困惑しているとリボンが何故か楽しそうに笑っていた。

「どうしたの？リボン。」

「いや。おい、千景。悪いんだがその料理適当に俺に持ってきてくれねえか。」

「い、いいけど。」

悪いんだがって言い方がリボンらしくなくて私は思わず頷いていた。

睨みあう2人を放っておき、私は目の前のテーブルに向かった。適当にお皿に料理を盛っていると誰かが私に近づいてくるのがわかった。顔を上げたらものすごい美人が私にっこりと笑いかけて話しかけてきた。

一応イタリア語は習っているけれど、だからと言って本場のイタリア語を聞きとれるほどの能力は私にはない。ぽかん、とした顔で見ているとその美人の顔が小馬鹿にしたように一瞬変化したのを私は見逃さなかった。

彼女は私が日本人で、イタリア語がわからないであろうことをわかったうえで話しかけて来ているのだ。そしてこうなるであろうことをわかっていて、リボンは私にここまで料理をとらせに来た。

つまり私はけんかを売られているらしい。

……知っている、リボン？私、負けず嫌いなの。

私はお皿を一旦テーブルに置くと目の前の美人にっこりと笑いかけた。姿勢を正し、真っ直ぐに女の顔を見据える。

不安を表に出すな。姿だけは真っ直ぐに凛々しくあろう。怯んだら、そこで負けだ。

自分にそう言い聞かせる。彼女は私の雰囲気が変わったのを察したのか、言葉に詰まりだした。よくわからないけど、何でこんな女が…、みたいなことを呟いているのが聞きとれた。何の事だかよくわからなくて、私は心の中で首を傾げる。

『そろそろ僕たちのお姫様を返していただけますか。』

「千景。勝手にうるつかないですよ。」

目の前に骸さんが私を庇うように現れイタリア語で目の前の女性に何かを言い、後ろから現れた雲雀さんに抱き寄せられた。男の人に抱き寄せられたのなんか久しぶりすぎて、私の頬は自然と熱を持つ。

「どさくさにまぎれて千景にセクハラするのはやめてください。怒られますよ。」

「よくわかってるじゃないか、骸。」

誰に？そう問おうとしたら声が聞こえた。

その声に私の心臓は大きく一つ鼓動を刻み、私は雲雀さんの腕の中で身を強張らせた。

「いい加減、放れてもらえますか？雲雀さん。」

「もう仕事終わったのかい？」

「何残念そうにしてるんですか。」

「はいはい。」

雲雀さんがとても名残惜しそうに私から放れ、開けた視界の向こうにいたのは、薄色の髪を持つ、会いたくて、会いたくて…、でも、会いたくなかった人だった。

「久しぶり、西崎さん。」

「沢田くん…。」

ととととと、会ってしまった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1656w/>

君と私の恋愛模様

2011年11月16日11時36分発行